

# YEARBOOK 2024 Vol. 49

## Haus der Begegnung

特集 第6回市民公開講座

Kyoto International Student House



(公財) 京都国際学生の家

## 【設立理念】

公益財団法人京都国際学生の家 の 成立の趣旨

Kyoto International Student House ・ Haus der Begegnung Kyoto

### PRINCIPLE AND PURPOSE

by Dr. Werner Kohler

“Haus der Begegnung” is a house where men from different continents and cultures, of different races and colors, different social strata, religions and outlooks live together. The house members face realistically the difference of national, cultural and religious backgrounds. It is a “House of Encounter” as its name “Haus der Begegnung” indicates. It is an experimental training place for peace, which is not merely absence of war, a training place for the construction of a new form of society necessitated by the demands of the world of tomorrow.

The house life is guided by the following considerations.

1. The living together in the International Student House Kyoto is not an end in itself. Nor is it a world of its own. It is concerned with the daily human society to which we all belong. Our human society, as history shows, is in need of constant renewal. Forms of society change, old traditions decline, new ones arise; but Life Together is the destination of man.

2. Life Together is life in relation with others, with those we like and those we dislike, with those who have different convictions and opinions. Life Together means love and respect for those who are different. We have the freedom to agree to disagree with one another.

3. Life Together is life in daily renewal. We all have a natural inclination to favor our own beliefs and concepts. The house members let themselves be mutually questioned and challenged in their opinions, attitudes and habits. By nature we are inclined to have relations with, and fulfill responsibilities to, our own family group and those of our own social milieu or those that are useful to us. We aim to outgrow these self-centered inclinations. Life Together allows for diversity and runs counter to conformity and unconformity. The traditional societies classify people according to their educational, political, moral and financial standards. Life Together transcends these traditional classes.

4. Life Together is an adventure and an experiment. “Haus der Begegnung” in Kyoto practices in small dimension a new form of society. This new society is both conservative and revolutionary in that it respects the past with its traditions and looks to the future with its possibilities. It is a form of society which is renewing itself in free self-criticism of its members. The basis of this Life Together is Life itself.

Thus it is hoped that students living in this house are willing on their own initiative to participate in various activities such as seminar-like meeting, common meals and house chores of different kinds.

\*Dr. Kohler was the most central among the forwarder of HdB in 1965. He and Dr. Inagaki served as the first House Farther.

表紙のデザイン作成者 :

Adhistry Larasati, Le Saout Orane and HM Yuko Nakakuki

## 【巻頭言】

### 国際理解教育の改革方向 —新ユネスコ教育勧告の影響について—

村田翼夫

(HdB 評議員、Year Book 編集委員長、筑波大学名誉教授、1965OM)

2023年11月にユネスコの第42回総会において新たな教育勧告が採択された。その内容は、世界の学校教育や社会教育のみならず、各種の国際交流活動にも適用されている。それは、言うまでもなくわが国の国際理解教育にも影響を与えつつある。国際交流の場を提供する「京都国際学生の家」に対してもどのような意義を持つかについて考察してみる。

わが国の国際理解教育は、戦後まもなくは人権、他国理解、国連研究が主要な実践テーマであった。1950年代には、ユネスコ協同学校が6校設立され、それらのテーマを取り上げた。1960年代になると高度経済成長に伴って国際交流が盛んになり、海外における日本人学校の設立、外国人留学生の受け入れなどに力点が置かれた。1974年に出された中央教育審議会の答申「教育・学術・文化の国際交流について」においても国際社会に対応する「日本人の育成」を強調していた。同じ1974年の11月にはユネスコ総会において「国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告」が採択された。しかし、経済発展を遂げつつあった日本では、国際社会と共に生きる日本人に関心が向けられ、海外・帰国子女教育、外国語教育、教育交流などが推進された。日本文化や伝統芸能への理解も強調された。その結果、ユネスコ勧告の内容は、余り実施されなかったのである。

1998年より全国の小中学校において「総合的な学習の時間」が導入されるようになった。その時間に国際理解教育、情報教育、環境教育などを横断的・総合的に指導していくことが要請された。多くの学校において同時間に国際理解教育は取り組まれたが、実際にはその時間に外国語学習（英語学習）に力点を置く学校も多かった。

2023年11月に50年ぶりにユネスコ教育勧告が総会で採択された。それは「平和と人権、国際理解、協力、基本的自由、グローバル・シチズンシップおよび持続可能な開

発のための教育に関する勧告 (Recommendation on Education for Peace and Human Rights, International Understanding, Cooperation, Fundamental Freedoms, Global Citizenship and Sustainable Development)」と題する。この勧告は、教育を通じて永続的な平和、人権保障、国際理解、ならびに質の高い教育の促進を目的としており、学校教育のみならず、社会教育、家庭や地域、民間団体などあらゆる教育組織に関わっている。総花的とも評されるが、全会一致で合意され、人類史が到達した貴重な国際勧告とも言われている。ここでは、新しい表現であるグローバル・シチズンシップおよび持続可能な開発のための教育に焦点を当てて検討してみる。

グローバル・シチズンシップに関連して、目的の6項目(e)において「人類と惑星地球へのつながりと帰属の意識；この惑星に対する責任、そして人間相互と他の生命と自然そのもののニーズや権利を尊重する責任を分かち合うグローバルなコミュニティとしての人類の理解」をあげている。また、主導原則の(1)において「地域とグローバルの相互関係を強調し、教育が国際的かつグローバルな視点を持てるようにする」とある。後者に関して、前文で「持続可能な開発目標を達成するために持続可能な開発のための教育(ESD)の役割を重視し、必要な知識とスキルを習得できるようにする。」と述べられている。

これらの内容の具体化するために重要な項目として目的の中で、「多様性の尊重」、「協働するスキル」、「シチズンシップ・スキル」および「メディア情報リテラシー」が強調されている。「協働するスキル」は、「建設的な方法で感情や意見を効果的に伝えあい、責任感と敬意をもった行動により協働的な交流をすすめ、参加型によって計画し、共通する課題の解決に取り組む能力」。「シチズンシップ・スキル」は、「デジタル時代において、地域、国家およびグローバルな文脈の中で、倫理的かつ責任ある行動ができ、市民生活や社会生活に十全に参画する能力」と定義されている。

さらに、主導原則においてインクルーシブで質の高い教育を保障するために「コンヴィヴィアル(共生的)な関係性(convivial relations)や隣人意識、所属感を醸成するという視点から、互惠性(reciprocity)と共感共苦(compassion)の心を培い、ケアの倫理と連帯を促進する」ことを重視している点は注目される。コンヴィヴィアリティ(conviviality)とは、注釈に寄れば、単に静的に共存することではなく、動的・相互の関係性を意味するとのこと。また、「共にわくわくし、互いに生き生きさせあうような関係性」と説明されている。その意味で「共感共苦」や「互惠性」の用語のねらいも理解できる。コンヴィヴィアリティの用語は、イヴァン・イリイチが使用したラテン系言語から来ていると言われる。ケアの倫理(an ethic of care)についても、注釈をみると、「ケアは配慮や気遣い、世話といった一般的な日常語ではない。自律的主体を柱とする強い個人モデルによる、ケアを蔑ろにした社会を問い直し、人は誰しも他者

に依存しつつ生まれ育ち生きて老いる脆弱性を持つゆえに、ケアのニーズへの応答を中心に据えた社会の未来を構想するもの」とある。

このような深い意味を有する新たな教育を各学校において実践できるのか不安を感じず。しかし、多文化を背景に持つレジデントの共生を目指す「京都国際学生の家」にとっては、まさに適用できる正鵠を得た内容ではないだろうか。共感共苦のコンヴィヴィアル（共生的）な生活を送りケアの倫理と連帯を促進する。多様性を尊重しつつ協働するスキル、シチズンシップ・スキルを身につける。そうした共同生活を通して国際性、グローバル性を育むなど。ハウスが目指す姿の特色がみえるようである。

また、教育段階における要件の項目をみると、高等教育・研究の欄において「高等教育機関が、インクルーシブな学習環境を確保し、教育やコミュニティにおける科学的・技術的・革新的知識の創造と普及を支援し、関係者とともに学際的かつ越境的に知識を共に創り、対話を促進することも含まれる。」と述べてある。ハウスには異なる文化背景を持ちかつ多様な分野の学習・研究をしているレジデントが同居しており、学際的、越境的に対話を促進しやすい恵まれた環境にある。その特性を生活に活かし、新しい共同体モデルを創造したいものである。

この新しい「ユネスコ教育勧告」を読むといくつかの特色が見い出せる。吉田敦彦氏も指摘しているが<sup>i</sup>、第1は、惑星地球とのつながり、他の生命や自然のニーズの尊重などにみられるように、人間中心主義からの脱却である。第2は、共生やケアの倫理、共感共苦などの表現にみられるように、個人主義（自律的主体）を強調せず人間の関係性に重きを置いていることである。第3は、社会情動的学習、人格の全体性、ホリスティックで変容的なプロセスや共感（*empathy*）の尊重などに表れているが、合理主義や主知主義を強調していないことである。いうなれば、従来、欧米諸国において尊重されてきた人間中心主義（ヒューマニズム）、植民地主義（コロニアリズム）、近代主義（モダニズム）の主な価値、教育原理などが重視されていないのである。その観点からもこれは画期的な教育勧告であり、世界各国における教育実践にどのように浸透して行くか、注目に値しよう。

---

<sup>i</sup> 吉田敦彦「新しい“ユネスコ教育勧告”の人類史的意義」（日本国際理解教育学会、「1974年ユネスコ教育勧告」改訂記念イベント報告書、「私たちの教育を捉え直しともに再想像しよう—ユネスコ教育勧告50年ぶりの改定を受けて—」）25～28頁、2024年6月

## ～ 目次—CONTENTS ～

### 【設立理念】

PRINCIPLE AND PURPOSE .....	見返し
-----------------------------	-----

### 【巻頭言】

・ 村田翼夫	国際理解教育の改革方向 —新ユネスコ教育勧告の影響について— .....	1
--------	-----------------------------------------	---

【目次】 .....	4
------------	---

### 【追悼文】

・ 内海博司	平野克己氏の思い出 .....	6
・ 稲垣（浅野）安沙	カトリン・コーラー追悼文 .....	10

### 【特集：第6回市民公開講演会】

・ 内海博司	市民公開講演会の目的について .....	14
--------	----------------------	----

#### < HdB で育った先輩達 >

・ 大菅克知	すべてはスーダンから始まった .....	16
・ Mattias van Ommen	From Mario to Siebold .....	20

#### < HdB の過去・現在・未来 >

・ Erika Nakano, Nguyen Bich Ngoc (Jade), Kota Nomura (Workshop Toban)	Let's think of a title together here .....	26
・ 川野家稔	京都国際学生の家 (HdB) 在寮記 .....	30

### 【OM 便り】

・ 小島和典	あれから55年 .....	33
・ 湯 夢佳	吾心安処是故郷—此の心の安らかなる処は吾が郷なり— .....	35
・ 村田翼夫	タイへの日本語指導員派遣—レジデントの国際交流体験— .....	37
・ 辻本圭助	扉の向こう .....	40
・ 岩崎隆二	HdB は『出逢い』の壮大な実験場！？ .....	42
・ チナーラ・アブディカディロワ	相縁奇縁 .....	43

### 【ハウスペアレンツとレジデントより】

・ Le Saout Orane	From April 2024 to January 2025 Drawing our time at HdB .....	44
・ Yuko Nakakuki (HM)	Our Official - Unofficial Event Schedule .....	45
・ 中久木裕子 Yuko Nakakuki (HM)	HdB に憧れた少女がハウスマザーになった A girl who admired HdB became a House Mother .....	47
・ 中久木卓也 Takuya Nakakuki (HF)	人生は一言で変わる—「あなたは座っているだけでいいから」 Life can change with one word—“All you have to do is sitting down” .....	49

・ Adhistry Larasati	First Night at HdB	51
・ Anthony Quispe	Volunteering in Thailand	53
・ Ayano Fukuda	The Senselessness of War	55
・ Damian Ratto	My sister visits HdB	57
・ Gayatri Gawande	In Love with TOTO-san ♥	58
・ Guo Kunhao	Six Months at HdB: My Experience	59
・ 深沢健人 (Kento Fukasawa)	“THE APPRENTICE” 視聴後レビュー	60
・ Kota Nomura	The Hobby I Never Thought I Would Use	61
・ Nguyen Bich Ngoc	HdB means House of Encounters	62
・ Ryosuke Meki	Starting To Be a House Mama’s Boy at 22 22歳から始めるマザコン	65
・ Shun Aimoto	Influenced by HdB	66
・ 森寿々花 (Suzuka Mori)	HdB での新しい生活	67
・ Toshihito Shiota	No Dance Party No Life	68
<b>【資料】</b>		
・ 公益財団法人京都国際学生の家 役員等		69
・ 2024年度補助金・寄付金・その他ご支援		71
・ 公益財団法人京都国際学生を家の略史		73
・ 公益財団法人京都国際学生を家の利用者の集計		78
・ 公益財団法人京都国際学生を家の後援会会則		81
・ 公益財団法人京都国際学生を家の同窓会会則		82
・ 施設概要		85
<b>【編集後記】</b>		
・ 吉村一良	定年後に思うこと	86
・ Adhistry Larasati	Reflection on Yearbook	87
・ 笹山幸子	“Yearbook” と「HdB 市民公開講座」を広めたい	88
<b>【賛助広告】</b>		90
<b>【寄付金振込用紙】</b>		

## 【追悼文】

### 平野克己氏の思い出

内海博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授、1965OM, 元 HF)

平野克己評議員が 2024 年 10 月 9 日に 81 歳で永眠致しました。心から哀悼の意を表したいと思います。平野氏は、私が 1962 年京都大学の教養部 2 回生で、会長をしていた学生サークル・京大留学生友の会 (KRT) の仲間でした。氏は当時 1 回生で、その後、このサークルの会長も引き受けて下さったリーダー格でもありました。私は大学院に進みましたが、彼は卒業して企業に就職、その後音信が途絶えていました。10 数年前に、このサークル KRT の OB 会が開催された時に再会しました。定年後は京都に住んでいるというので、(公財)京都国際学生の家(HdB)の運営を手伝ってほしいかとお願ひして、HdB に関わることになりました。同様な関係で、岩崎隆二元理事(HdB の OB)、吉田和男評議員、深海八郎評議員、笹山忠則学寮運営委員等、多くの KRT の OB に HdB の運営に参加して頂いています。

このように多くの KRT の OB が HdB を手伝ってくれているのは、学生時代から留学生問題に関心を持ち、更には下記の「西日本見学旅行」の出来事が共有されていたからでしょうか。KRT 部員は、如何に日本の留学生問題が根深く、多くの矛盾を含んでいるのかを身にしみて感じていたからだと思います。

平野氏は、この見学旅行に参加して会計を担当していただけに、私にとっては戦友のような友人でした。この旅行では 1997 年に閉鉱になった三池炭鉱の地下に潜ったり、東洋



工業(現在のマツダ工業)等を視察しました。62 年前の写真に写っている後列の真ん中が内海で、右横で帽子を被ってカメラを持っている人物が平野氏です。

学生サークル(KRT)の思い出と日本人の外人意識

このサークルで在日留学生問題の根の深さを知る事件に遭遇し、それが契機で私自身は、生涯に亘って留学生と関わることになりました。



事件が起きたのは、私が学部2回生で、委員長の初仕事として計画した「東南アジアの留学生と西日本の工業地帯を訪問する」と銘打った西日本見学旅行の報告会でした。趣意書を作成し、京大総長や文部省・外務省・毎日新聞社の応援を得て実現し、その目的は達成したかと思えた報告パーティで起きました。この「西日本見学旅行の報告パーティ」には、京大総長をはじめ、学生部長、教養部長等京大関係者ばかりでなく、その旅行を後援して下さった会社の人達も参加していました。旅行参加者24人(留学生13人、日本人8人、教官1人、事務官2人)が出席して、楽しい報告パーティが始まるはずでしたが、いくら待てども東南アジアからの男子留学生7人が出席せず、その事態に教養部長が「おまえらは、自分達だけで楽しんでたのか」と怒りをぶちまけ退席しました。留学生で出席したのは白人系の4人とタイの女子留学生と中国の留学生の6人でした。我々は、東南アジアの留学生が抱いていた不満を薄々感じてはいたのですが、それを十分に汲み上げる力を持っておらず、弁明できませんでした。彼らは報告会をボイコットするという方法でしか、その意思を表現出来なかったことは非常に残念に思いましたが、これを契機に京大では留学生の教育や事務システム等がずいぶん改善されました。

ボイコットの理由は、旅行中彼らを感じた、遣り場のない憤懣と悲しみでした。もともと「主にアジア諸国からの留学生と日本人学生とが共同生活をしながら旅行し、瀬戸内の素晴らしい自然とその周辺に散在する各種産業を見学しながら、日本の真の姿を捉えたい」という壮大な趣旨の見学旅行を計画していました。しかし、出発直前に大学側の意向で、我々のサークルで活動していない数人の白人系留学生(院生や研究生)の参加を受け入れざるをえませんでした。結果として、行く先々の工場の人達の関心も、テレビや新聞のインタビューも、数人の白人系留学生と女子留学生にだけ集中しました。それらに対する不満と、同行した教官までも同様な行為を示したとする抗議のボイコットでした。「主にアジア諸国の留学生と言っておきながら4人もの白人系留学生の参加を許したのはけしからぬ」、「自分達を資金集めのだしに使ったに過ぎない」と批判する者もいました。10日ほどの旅行中、行く先ぎきのテレビや新聞に、白人系留学生しか登場しないことに最初の内こそ無関心を装っていた彼らも、ついに怒りを露わにしていたことが思い出されます。結局、マスコミは言うに及ばず、京都ばかりでなく津々浦々の日本人の多くが、外人=白人の意識しかないことを認識させられた旅行でした。

#### 財団法人 京都「国際学生の家」について

東南アジアの留学生によるボイコット事件があった後、一緒に生活を共にするくらい親しくならないと彼らの本音は聞き出せないと痛感し、京都に留学生寮は無かったこともあり、サークル活動の一環として留学生寮建設を文部省や外務省に請願する活動もしていました。その2年後、聖護院に民間の(財)京都「国際学生の家」、山科に公立の京都国際学友会館(現在の山科留学生寮)、1年ほど遅れて民間の(財)女子留学生寮(現在廃寮)が建設されました。当時の京都の留学生数は100人ほどでしたが、現

在は 12,000 人と大幅に増加したにもかかわらず、その後に増えた留学生寮は非常に少なく、残念なことに留学生だけが居住する留学生寮が多いのが現状です。

ボイコット事件後もサークルの設立趣旨の「留学生と日本人学生との対等な活動」という大義名分とは裏腹に、一方的な日本人学生の奉仕活動としてしか成立しないサークル活動に悩んでいました。その頃「出会い(encounter)」と「共同の生(life together)」を柱とした、我が寮の前身である(財)京都「国際学生の家」(HdB:出会いの家(Haus der Begegnung)が別称)の設立趣意書を見て、日本人学生も対等の立場で入居できることに感動して、一緒に活動していた多数の留学生と共に入寮したことが思い出されます。この HdB は設立者であり「共同の生」の理念を創ったスイス人牧師、故ウエルナー・コーラ (Werner Kohler) 博士(神学者)と趣旨に賛同した故稲垣博京大教授との緊密な国際的協力と、スイスと日本の民間人の寄付金によって設立された京都で初めての、日本人も混住する留学生寮 (2013 年に公益財団法人に認可) でした。

### 平野氏の HdB での活躍

彼が社会で得た豊富な知識と留学生に対する熱情がなかったら、2016 年から始まった HdB の「本館耐震・リフォームと西館建て替え」の募金活動及びその工事遂行は出来なかったと思います。更に平野氏の活動報告には、やり遂げられなかった多くの問題点が述べられています。残された我々への課題として、真摯に受け止めると共に、感謝の念を示したいと思います。

彼が募金委員会事務局長を進んで引き受けてくださったお陰で、募金活動は成立しました。その経過報告は、『YEARBOOK 2019』の「本館耐震工事先行着手と今後の展望」と、『YEARBOOK 2020』の「本館耐震工事完了報告及び今後の展望」に報告されています。2017 年 5 月に募金委員会が発足し、故長尾真氏(京都大学名誉教授、元京都大学総長、元国立国会図書館長)と故立石義雄氏(京都商工会議所会頭、オムロン名誉会長)に顧問になって頂きました。その後、京都府・京都市への訪問、京都商工会議所、京都仏教会、ライオンズクラブなどの訪問、クラウドファンディングの開設、またマスコミへの働きかけ等、考えられるあらゆる募金活動を平野氏と一緒に行いました。目標金額、本館 1.5 億円・研究者棟 1 億円の計 2.5 億円でスタートしましたが、2019 年 1 月時点での募金が約 2,200 万円という結果に、計画を本館の耐震・老朽化対策のみに絞って 8,000 万円の工事額に変更し、2019 年 2 月から新募金案(第 1 期工事)として再活動を始めました。残りの工事は 2 期工事としました。また募金額だけでは不足する場合も想定し、京都信用金庫に借入金の打診をし、借り入れの条件を確認しました。工事着工予定の 2020 年 4 月には学生達も含めて全員退去 (HdB を一時閉鎖)、8 月には工事完了として報道関係にも告知して進めてきました。

10 月に入り 8,000 万円の工事予定金額を 3 社に見積もりを取ると、信じられないような 3.5



倍から5倍ほどの工事見積額が出ました。1社は2.985億円、1社は4.25億円、もう1社は見積もりを辞退しました。その高騰の原因は、これまでの調査で建物の天井や床材質にアスベストが出て来たこともあるが、オリンピック、台風被害などの影響で人件費、建築資材の高騰が原因のようでした。もし1年工事を延期しても工事費が下がるかどうかは不明であるとの状況判断から、臨時理事会を開催した結果、耐震補強工事と老朽化したガス管の更新のみを1期工事として、工事期間は3ヶ月、寮生が在寮のまま実施可能となりました。この工事によって耐震基準をクリアした本館となり、少なくとも地震に対する安全性は確保されることになりました。これ以外の老朽化対策などは引き続き募金活動を鋭意進めることになりました。

募金委員会は、2017年9月から2020年7月までほぼ毎月実施し31回を数えました。結果として、募金総額は最初の予定金額2.5億円の10の1程度までになりました。しかし、この募金活動を通じて、京都の各界、マスコミなど多くの方々にHdBの存在意義をアピールすることができたのも大きな成果であると感じています。更に、「OM会の結成」と「HdB市民公開講座」の開催を決めて、第1回（2019年6月13日）から本年度の第6回まで連続開催し、組織活動への展望も開け、今後のHdBの運営の方向性が示されることになりました。これらを率先したのも、平野氏でした。

#### HdBの建物関連の今後

築60年を経過しているにも関わらず、大幅な改修がされていないため、各所に老朽化が見られます。HdBは二組のハウスペアレント制を敷いていたが、2000年に日本人ハウスペアレントだけになったことで、未使用の部屋が多数あります。また地下には暖房用のボイラーを設置していたが、老朽化で廃止したため、地下室にも広い空き部屋が出来ています。2017年の理事会で作成された総合改造計画では、耐震工事に加えて、そのような空き部屋の有効利用も考えて工事計画を立てていましたが、残念ながら実現出来ていません。今後の課題として引き継がれています。

このような大工事を行い、更には工事中の点検なども、平野氏が率先してやってくれました。氏が一番心残りとして掲げた二つの工事について、残された者として、今後も新研究者棟の建設に向けて、資金調達をも含めて、検討を継続していきたいと思っています。（1）本館の居室の増加：本館の間仕切りを変更して居室を増やし収入増を図る。（2）研究者棟の更新：西館と呼ばれる研究者棟の建物は内外とも老朽化しており、今回1億円の計画で募金、更新を図ったが実現できていません。研究者用の宿舎は、これまでも学生達の寮費を補う収入源としての役割もあったので、本学寮にとって必須の建物です。

一番の心残りは、晩年の平野氏の体調の変化に気づいていながら、その原因究明を明らかにするように、彼を十分に説得できなかったことです。残念でしかたありません。平野さん、今後も天上からHdBの行く末を見守って下さい。

## カトリン・コーラー追悼文 —世代を超えた友情に感謝—

稲垣（浅野）安沙（日本）

（初代ハウスベアレンツ 稲垣博・和子 孫）

<English below>

昨年、2024年12月23日に、コーラー先生の長女カトリンが、病のため逝去されました。私はカトリンと、彼女の妹ベロニカとの関係が続いており、ここでカトリンとの思い出を寄稿させていただきたいと思います。

私は初代ハウスファーザー稲垣博の孫です。このため、幼少期から、カトリンが京都を訪れた際に何度かお会いする機会がありましたが、私が彼女と直接連絡を取るようになったきっかけは、2012年の私の父稲垣純の死でした。父は、カトリンや妹ベロニカとのやりとりを続けていて、亡くなる当日、数十年ぶりに、ベロニカが夫とともに自宅を訪れてくれたのです。その数時間後、父は自宅で亡くなりました。この出会いが、私と姉妹をつなぎ合わせてくれました。

父の死後、私はスイスに向かいました。スイスでは、ベロニカのご自宅にホームステイさせていただき、カトリンと一緒にコーラー夫婦とゲオルグ（コーラー夫妻の息子）が眠る Saas を訪れました。伝統的なスイスののどかな田園地帯のなかにポツンと、よく手入れされた教会がありました。その墓地に、彼らは眠っていました。私はなんだか、亡くなった父も私と一緒にその場に立って祈りを捧げているような、不思議な気分になったことを覚えています。その後、カトリンとはいろいろなことを話しました。スイスと日本の食べ物の違い、生活文化の違いから、宗教について、政治について、戦争について……。カトリンは、自分が理想とする世界をしっかりと持っていて、それを実現するために彼女なりに一生懸命取り組んでいました。自分の理想が正しいと思うあまり、人と衝突することもあるようでした。しかし、彼女の前提には、いつも深い「愛」があったのだと思います。

帰国後も、私は彼女と定期的に連絡を取り合っていました。2022年に私に長男が産まれた時、彼女は、エーデルワイスの音が出るオルゴールと、手編みの赤ちゃんの靴下、美味しいスイスのチョコレート（これはきっと私だけのため!!）、ポストカードを送ってくれました。私は育児と、その時取り組んでいた博士論文執筆にかまけて、彼女に返事をずっと出さずに過ごしていました。

2024年12月ごろ、妹のベロニカから電話がありました。カトリンが危篤だと。彼女は大腸がんで、痛みのコントロールがつかず、ホスピスで過ごしているということでした。ベロニカから症状を聞いて、私はもうカトリンが長くないことを悟りました。

そして翌日には、彼女のためにクリスマスギフトを送りました。本当に大したものを送ることができませんでした。メッセージカードと、5羽の折り鶴です。5羽の折り鶴は、彼女を含めた5人の兄妹（カトリン、ゲオルグ、ベロニカ、エリザベス、バーバラ）を意識して送りました。亡くなった祖母（稲垣和子）が残してくれた、昔の日本の風景の切手をたくさん貼って送りました。彼女にもう会えないと思うと悲しかったけれど、亡くなる前になんとか感謝の気持ちを伝えたかったのです。ベロニカに病床へ持って行ってもらうよう頼みました。ベロニカは、私のことづけを果たしてくれました。私からのプレゼントを受け取ったカトリンは、半覚醒状態であまり意思疎通をとることができなかつたそうです。でも、折り鶴や、私のメッセージはしっかり受け取ってくれた、とのこと。その後12月23日に、彼女は天に召されました。1月14日に、彼女はSaasのお墓に眠る家族の元へ行ったそうです。

コーラー夫婦と私の祖父母稲垣博、和子が、ここHDBで醸成したご縁は、半世紀以上の時を越えて、孫である私までつながりました。これからも、このご縁を大切に育んでいきたいと思えます。この世界は広く、どの立場から見るとかで歴史や真実が大きく異なること、「日本人であること」とはどのようなことなのか、守るべきこと、変えていくべきこと・・・私の視野を広げ、考えを深めさせ、問いを立て続けることへの感受性を高めてくださった大切な出逢いを、私も次の世代へ引き継いでいきたいと感じています。

カトリン、ありがとう。どうぞ安らかに眠りください。あなたが私にしてくれたことを、私も誰かにしていきたいと思えます。

Last year, on December 23, 2024, Prof. Werner Kohler's eldest daughter, Kathrin, passed away due to illness. I have had an ongoing relationship with her and her sister, Veronika, and would like to contribute my memories of her here.

I am the granddaughter of the first housefather, Hiroshi Inagaki. For this reason, I had the opportunity to meet Kathrin several times during her visits to Kyoto since my childhood, but it was the death of my father in 2012 that brought me into direct contact with her. My father continued to correspond with Kathrin and her sister Veronika, and on the day of his death, for the first time in decades, Kathrin's sister, Veronika, visited me at our home with her husband. A few hours later, my father died in his home. This encounter brought my sisters – Kathrin and Veronika - and I together.

After my father's death, I went to Switzerland. In Switzerland, I stayed with Veronika in her home, and together with Kathrin, we visited Saas, where Kohler and his wife, and also Georg, are buried. There was a well-maintained church tucked away in the peaceful, traditional Swiss

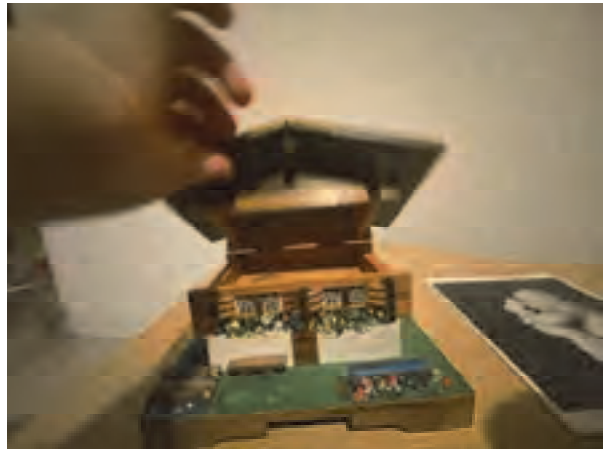
countryside. In the cemetery, they were laid to rest. I remember that I had a strange feeling that my late father was standing there praying with me. After that, Kathrin and I talked about many things. From the differences in food and lifestyle between Switzerland and Japan, to religion, politics, war... Kathrin had a firm idea of her ideal world and worked hard to realize it in her own way. She sometimes seemed to clash with others because she thought her ideals were so right. However, I believe that there was always a deep “love” in her premise.?

After returning home, I kept in touch with her regularly, and when my first son was born in 2022, she sent me a music box with the sound of edelweiss, hand-knitted baby socks, delicious Swiss chocolates (I am sure these were just for me!!!), a postcard ), and a postcard. I was busy raising my child and working on my doctoral dissertation at the time, so I never wrote her back.

Around December 2024, I received a phone call from my sister Veronika. Kathrin was in critical condition. She had colon cancer and was in hospice because of uncontrolled pain. When Veronika told me of her symptoms, I realized that Kathrin did not have long to live. And the next day I sent a Christmas gift for her. I really couldn't send much. It was a message card and five origami cranes, representing in my mind her and her four siblings (Kathrin, Georg, Veronika, Barbara and Elisabeth). I sent them with many stamps of old Japanese scenery left to me by my late grandmother. I was sad to think that I would never see her again, but I wanted to express my gratitude somehow before she passed away. I asked Veronika to take them to her hospice bed. Veronika fulfilled my request. Kathrin, who received my gift, was in a semi-awake state and could not communicate much. However, she received and recognized the paper cranes and my message very well. On December 23, she passed away, and on January 16, she was put to rest in her hometown Uster, followed by a church ceremony attended by many friends and locals.

The relationship that Werner and Nelly Kohler, together with Hiroshi and Kazuko Inagaki, fostered here at HDB has now transcended the passage of more than half a century and extended to me, her granddaughter. I would like to continue to nurture this relationship with great care. The world is a big place, and history and truth differ greatly depending on which perspective you look at it from, what it means to be Japanese, what should be protected, what should be changed... I would like to pass on to the next generation these important encounters that broadened my perspective, deepened my thinking, and heightened my sensitivity to continue asking questions. I feel that I would like to pass it on to the next generation.

Thank you, Kathrin. Please rest in peace. I would like to do for others what you did for me.



Birthday gifts from Kathrin



From the left, Kathrin,  
Elisabeth, Nelly, Veronika  
and Barbara



From the left, Kathrin and  
Elisabeth

# 【特集：第6回市民公開講演会】

## 市民公開講演会の目的について

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授、19650M, 元HF)

6年前に、京都国際学生の家卒寮生の会（OM会：Old Member）が発足しました。同時に、卒寮生及び在寮生達による第1回市民公開講演会を2019年6月8日（土）に京大楽友会館で開催しました。第1の目的は、卒寮生同志、卒寮生と在寮生との交流を深めることでした。第2は多くの京都市民の皆様（公財）京都国際学生の家存在とその活動状況を知って頂く目的でした。その後、毎年開催して2024年度で第6回になります。その内容はイヤーズブックの特集として、活字として皆様にお届けしています。更に、過去の公開講演会はイヤーズブック(pdf)としてHdBのホームページに公開しています (<http://hdbkyoto.jp/>) ので、ダウンロードして下さい（ホームページの「当財団について」を開き、「イヤーズブック」を開いて下さい）。

第7回市民公開講演会も、本年6月頃に開催する予定です。決まり次第、チラシやメール等でお知らせしますので、多くの皆様にお出席して欲しいと願っています。

留学生・日本人学生が共同生活 京の民営寮 HdB

### 国際理解を育む「家」次代も

留学生と日本人学生が共同生活する学生寮「京都国際学生の家（HdB）」が10周年を迎え、10月10日（土）に京大楽友会館で第6回市民公開講演会を開催する。卒業生が中心となり、在寮生と交流を深めるとともに、市民の皆様にもHdBの存在と活動を知っていただく。講演会は毎年開催し、今年で10周年を迎える。講演会の内容はイヤーズブックの特集として、活字として皆様にお届けしています。更に、過去の公開講演会はイヤーズブック(pdf)としてHdBのホームページに公開しています (<http://hdbkyoto.jp/>) ので、ダウンロードして下さい（ホームページの「当財団について」を開き、「イヤーズブック」を開いて下さい）。

第7回市民公開講演会も、本年6月頃に開催する予定です。決まり次第、チラシやメール等でお知らせしますので、多くの皆様にお出席して欲しいと願っています。



# 京都国際学生の家 Haus der Begegnung (HdB)

## 第6回市民公開講演会 入場無料

日時：2024年6月29日（土）13:00～16:10

場所：京都教育文化センター 103号室

〒606-8397 京都市左京区聖護院川原町4-13 TEL. 075-771-4221

HdBは1965年より59年間、外国人学生と日本人学生の出会いの家として活動してきました。その歴史と現在の活動状況、未来への展望を卒業生と在寮生との講演で紹介させていただきます。

### 開会の辞

13:00～13:10 内海 博司（理事長、京都大学名誉教授）

### 第I部 HdBで育った先輩達

13:10～14:00 すべてはスーダンから始まった

- 途上国の保健医療にたずさわって -

大菅 克知（医師）

14:00～14:50 From Mario to Siebold: How Japanese Video Games

Culture Guided Me to Kyoto: マリオからシーボルトへ

- 日本ゲームカルチャーの京都への導き -

ヴァンオメン・マティアス（同志社大学社会学部社会学科助教）

### 第II部 HdBの過去、現在、未来

15:00～15:45 外国人学生及び日本人学生から

中野瑛理香、Nguyễn Bích Ngọc、野村洸太

15:45～16:15 京都国際学生の家(HdB) 在寮記

川野家稔（0M1期生、元日立製作所

・情報通信事業部副技師長）

### 閉会の辞

16:15～16:20 吉村 一良

（理事、京都大学名誉教授）

参加：来聴歓迎。どなたでも参加できます。

主催：公益財団法人 京都国際学生の家

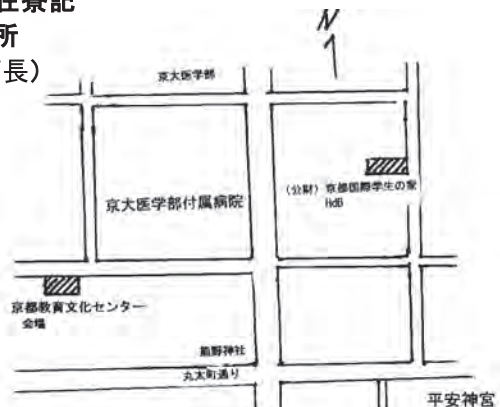
後援：京都新聞

連絡先：（公財）京都国際学生の家

京都市左京区聖護院東町10

電話/FAX：075-771-3648

ホームページ：<http://hdbkyoto.jp/>



## <HdB から育った先輩達>

### すべてはスーダンから始まった -途上国の保健医療にたずさわって-

大菅克知  
医師 19840M

1984年春に、(公財)京都国際学生の家(HdB、以下ハウスと略す)に入寮した私は、夏休みにスーダンの医療事情を視察に行く機会を得ました。日本で学んでいた医学とのギャップに驚くと同時に、途上国の医療に目覚めるきっかけを得たのはこの時です。京都府立医大卒業後は感染症を学べる職場を渡り歩き、熱帯医学のメッカであるロンドン熱帯医学校で学んだ後は、エイズ・結核を中心に17年間途上国に住み、感染症の治療と予防に従事いたしました。ハウス時代の体験とその後の40年の日々を簡単にお話ししましょう。

#### 1. 1984年夏のスーダン

アフリカに行くに当たり、元日本海軍軍医で、戦後はWHOのマラリア対策で長くアフリカにおられた老先生を尋ねました。先生はこんな話をされました。「アフリカにいたある日、日本から若手の研究者がやって来た。彼はいきなりマラリアの最新の研究についてしゃべり出した。黙って聴いていた私は一言、“初対面の人間と会う時は、ポケットから手を出して挨拶をしろ。とっとと帰れ!” またある時、エチオピアの奥地に調査に行った時、曾長の前に連れて行かれた。曾長は黙ってコーヒーを注ぐ。こちらはジャリジャリしたこのコーヒーを飲み干す。また注がれる。また飲み干す。これを数回繰り返すと曾長はうなずき、調査に全面的に協力してくれたよ」。この話を聞いた当時は明治生まれの偏屈爺さんだなぁ、くらいにしか思いませんでしたが、後に国際の現場に出ると、この「相手に礼を持って接する事」の大切さを実感することになりました。この先生からスーダンを紹介されたのです。

スーダンの病院では、日本では見られない狂犬病やさまざまな感染症にやられた手遅れの患者さん、栄養失調の子供たち、女性の割礼にまつわる様々な問題、イスラム世界の精神疾患の扱い、病院の外では、40℃を超える砂漠の中で綿花栽培と移民労働者のマラリアや住血吸虫症問題などの公衆衛生の現場に接し、文化社会と疾病について大いに考えさせられる2ヶ月でした。

スーダンの帰りにこんなことがありました。ケニアのナイロビの街中を歩いていたら、いきなり黒人男性が両手を広げて前に立ちはだかったのです。しかもその人が“オオスガさん”と叫びます。驚いてよく見るとハウスのジャクソンビスワロさんでした。

夏休みに故郷のタンザニアに一時帰国するところで偶然出会ったのでした。ほんとに驚きました。

スーダンから帰ると私の頭の中は熱帯の感染症で一杯でした。ハウスのケシャブさんが高熱を出した時、マラリアにはまっていた私は何度も採血し、大学の研究室でマラリアの検査を繰り返しましたが、どれも陰性。市立病院感染症科に入院し腸チフスと診断されました。隔離されたケシャブさんの寂しそうな顔が今でも忘れられません。私の最初の誤診でした。

## 2. 卒業後は都立駒込病院と東大医科研で熱帯病と HIV 感染症を診る

内科研修を終えた後は、当時増えてきた HIV 感染症の患者さんを多く診ました。今は薬がたくさんあり HIV 感染症は慢性疾患となりましたが、当時は患者さんは日和見感染症にやられてみな亡くなって行きました。感染症に対する恐怖と差別の問題に直面したのもこの頃です。

企業の出張や青年海外協力隊などのボランティアで、アフリカやアジアに派遣された方が熱帯病にかかり帰国した患者さんも診ました。クリスマス休暇にタイの南部に旅行したイギリス人女性が帰国後発熱し、開業医で処方された抗生物質が効かないので送られて来ました。診察するとふらふらで立ってられません。脳性マラリアを疑い血液検査をすると、血液の中に悪性のマラリア原虫がウジャウジャいます。キニーネの点滴で一命を取り留めました。中米で寄生虫が脳に入って意識障害を起こした海外協力隊員や、アフリカのサバンナに調査に行った企業戦士が珍しいリケッチア感染症に罹った貴重な例も経験しました。

## 3. ロンドン大学熱帯医学公衆衛生大学院に留学

もっと本格的に熱帯医学を学びたいと思うようになり、1990年に London School of Hygiene and Tropical Medicine の修士課程に留学する事にしました。大英帝国時代にアジア、アフリカ地域に広大な植民地経営をしていた英国では熱帯医学が発達し、ロンドンとリバプールに熱帯医学の研究所が出来たのです。現在は病気の診断や治療だけでなく、予防医学としての感染症対策を指導する、国際保健医療の中心的役割を担う教育機関の一つです。

さて、ここまでは普通のお医者さんがやっている、病気を診断し治療することを、感染症を中心にやって来たわけですが、病気の発症という事件が起きてから対応するのが治療医学なら、事件が起きないように病気を予防するのが予防医学です。この後 25 年間は JICA と WHO を通じて、エイズと結核を中心に予防医学としての感染症対策に取り組むこととなります。

#### 4. JICA と WHO でのエイズと結核対策

貧困と縁が深い結核は途上国において最大の感染症です。ネパールでは結核が蔓延し、かつての日本のような状況でした。これを何とかしようと JICA が長年実施してきた結核対策を進めるため、1996年から4年間ネパールに滞在しました。

ネパールでも都会にはお医者さんがいますが、田舎には少ない。そして結核患者さんは田舎にもたくさんいるのです。感染性のある肺結核患者さんを早期に見つけ、結核の薬を6ヶ月間きちんとのもんでもらえば、ほとんどの患者さんは治ります。この早期診断治療がそれ以降の結核の伝播を防ぐ、すなわち予防医学なのです。では医者のない田舎でどうやって診断し治療するのか？地域を巻き込んだプライマリーケアシステムを現場の人々と一緒に模索しました。売春組織に売られ HIV に感染した女性たちの中には結核を発症する人も多く、治療のみでなく彼女たちの社会復帰を支援する NGO などとも協力しました。

1990年代のネパールは、地方を訪れると日本の原風景のような段々畑や、家族総出の田植えや稲刈りなど、息を呑むような美しい農村光景にしばしば出くわしました。そんなある日、村で出会った老人にこんなことを言われました。「日本は豊かだけど貧しい。ネパールは貧しいけど豊かだ。」返す言葉がみつかりませんでした。

WHO ではまず南太平洋の島々のエイズ予防プログラムに関わりました。プロペラ機で20カ国以上の離島国家を巡回すると、新たに出現した感染症に対する恐怖はすさまじく、エイズ患者に対する偏見と差別を変えることの難しさを実感しました。ある島では HIV 検査の結果は、本人ではなくまず酋長に伝えなければいけない。その村から叩き出すかは酋長次第であり、エイズ患者が亡くなったら島には葬らず、カヌーに乗せて海に流すと。新型コロナ感染症への人々の初期の反応と似ています。伝染病に対して初めに人間のとる行動は、古今東西さして変わらないようです。南太平洋の島巡りの折には、ガダルカナル島、タラワ島、トラック島、パラオ島、そしてニューギニア等の太平洋戦争の激戦地も慰霊訪問致しました。ジャングルを歩くと薬莢や水筒等も見つかり、弾丸よりマラリアや飢餓のために南の島に倒れていった幼い顔の日本軍兵士に思いをはせました。

WHO の結核対策には、東アジア地域の国々、特にフィリピン、ベトナム、カンボジアの3カ国を中心に活動しました。結核患者は、上記の国々に中国を加えた東アジアに多く、インドやインドネシア等の南アジアを加えると、世界の大部分の結核患者は人口の多いアジア地域に集中しています。感染症が貧困を助長し社会不安を招くことから、今世紀に入ると世界基金(Global Fund)や国連ミレニアム開発目標 (United Nations Millennium Development Goals) 等の追い風もありエイズ・マラリア・結核の3大感染症は各国で強化され、治療が比較的簡単な結核対策は順調に進みました。し

かし感染症と治療薬はいたちごっこをしますから、治療薬に抵抗する結核が増えることになり、人類と結核との戦いはまだまだ続くことになります。

## 5. まとめ

ハウスにいた学生時代に偶然スーダンの医療事情を視察したのがきっかけで、18年間の海外生活を含む25年間は、アジアの途上国を中心に国際保健・予防医学の仕事をしてきました。医学はScienceですが、医療や公衆衛生の問題は理屈では中々解決出来ません。価値観や人々の行動が文化や社会によって異なりますから、一つの方法で問題が解決するわけにはいかないのです。学問的に正しい方針を現場に合うように工夫することが大切です。また国際の現場の仕事では相手を敬う態度が大切だということも何度も経験しました。振り返れば学生時代に元WHOの老先生から与えられた助言はまさにその通りでした。そしてハウスで暮らした2年間の生活から学んだ、多様性を尊重し楽しむ態度が国際の仕事の基礎になったと実感しています。

## 6. 還暦を迎え思うところあり方向転換

大学を卒業してからの38年間は、病気の治療と病気の予防に取り組んで来ました。でも病気を治しても、病気を予防しても、人は必ず老い、そして死を迎えます。現在の医学は人を如何に長く生かすかが主で、如何に上手に死を迎えさせるかは考えていません。北タイで出会ったエイズと結核に侵されている患者さんは、死期が近いことを自覚すると自ら退院し、後は自宅で家族と共に仏教の教えに従って残った時間を過ごし、家族に見守られながら静かに亡くなって行きました。医師として人生の最期に関わりたいと思い始めていた私は、還暦を期に日本に帰国してから現在まで、在宅医療に携わって来ました。仏教で言う生老病死を明らめるなどと大それたことは言いませんが、さまざまな人生のさまざまな最終段階に接し考えさせられ、この広くて深い世界に日々教えられています。



講演会での大菅氏

## **From Mario to Siebold**

### **How Japanese Video Games Culture Guided Me to Kyoto**

Mattias van Ommen (Netherlands)  
(同志社大学社会学部社会学科・助教、20090M)

In this short article, I will reflect on how my research has been shaped through a series of chance encounters that bring together Japanese culture, video games, and cultural anthropology. Born and raised in the Netherlands, I benefited from access to Japanese popular culture, as well as the long historical relationship between the Netherlands and Japan. I cultivated these interests through exchanges in Kyoto, where I was able to conduct ethnography, which values understanding people on their own terms, in their own language. I apply these principles to qualitative research of video game player communities, which I hope will help in improving understanding between those who play, and those who do not.

#### 1. Encountering Japanese Culture

I was born and raised in the middle of the Netherlands, in an area (Utrecht) famous for “Miffy” and a hometown (Houten) known for its many and wide bicycle lanes. While in elementary school, like many others my age, one of the first encounters I had with Japan was through its games: specifically, Mario. At the time, the internet was not developed, so we had to borrow games from neighbors. Besides vibrant use of colors and cute character design, by the end of elementary school I started to get invested in games that had deeper stories and emotional



experiences. I was surprised to learn that all these types of games that I liked were from Japan. Even though they all used the same hardware, geographical origin and culture seemed to produce vastly different genres of games, reflecting cultural and artistic trends from that society.



This initial intrigue led to a passion during my teenager years. Compared to Japan, teens in the Netherlands don't have as many homework assignments or exam cramming, so there is

plenty of time to pursue hobbies and interests. At around 15 years old, I started writing about Japanese video games and co-founded a Dutch digital community featuring game reviews and discussions. I also started to develop my own games, and followed a science-oriented high school program that I would hope lead me to become a game designer.

Yet, these plans radically changed when I heard that YFU (Youth For Understanding) was offering scholarships to Dutch high school students to celebrate the 400<sup>th</sup> year of trade relationships between Japan and the Netherlands. At 17 years old, I was offered this scholarship, and I was happy to leave my life behind for a new adventure, still intrigued by the culture that created the games that I was so passionate about. I was placed in a homestay family in Nara prefecture, where I started to learn my first Japanese, and went to a prefectural high school (Sakurai high school). I became fascinated with learning about the food culture, as well as difference in customs such as needing to wear a school uniform. My experience belonging to the school's soccer club stood out the most, since there were so many differences, even though we were playing the same game as many kids do in the Netherlands. One is that there was no grass, which surprised me, as I thought it affected the game a lot. Moreover, the way in which seniors and juniors interacted with each other was quite new to me. Thus, as I had learned before, culture and society affects the way even entertainment such as games are played.

Through this experience, I learned to rethink of my life in the Netherlands in a new way. The things I took for granted and thought were “normal” or “common sense” were often turned upside down. As a relatively shy person that didn't always fit in back home, this exposure to alternative ways of being led me to develop myself in ways that felt incredibly empowering. From just video games, I started becoming more interested and writing about the culture at large. Doing so, I appreciated being able to speak to people on their own terms, using their own language, rather than a detached view. Later on, I learned that what I was doing was actually close to the methods of cultural anthropology.

As my exchange period came to an end, I was sad as I had felt I had just gotten used to the culture and language. Before I left Japan, one chance encounter in a Nara museum on “exchange student day” changed my life forever, as one student was a college student who told me about the program in Japan studies at Leiden university (thank you Gijs!). Since I was so fascinated with Japanese culture, I quickly changed my focus from hard science towards the social sciences as I got home and wrapped up my high school.



## 2 College Years: Towards Kyoto

I was happy to start my program in Japanese studies in Leiden, a beautiful college town with almost everything a short walk (or bike trip) away. Since Siebold lived there, there is a strong connection to Japan, and the program itself featured exchange opportunities to places like Nagasaki, Tokyo, Osaka, and Kyoto. Once it was clear that I was moving to Kyoto, *sempai* introduced me to HdB (thanks Agnoek and Edwin!). For a student like me, HdB was a great place to be because it allowed me to interact with Japanese students as well as international students. I remember learning a lot about other cuisines at the common meals, played tons of ping pong, and had a great time at overnight trips to Lake Biwa and Soni Highlands.

Besides just having fun and exploring Japanese language and culture, I also gathered data for my undergraduate thesis project, which was a sociological study on Japanese school clubs. Some HdB residents agreed to share their experiences, and many of the interviews were conducted in the lounge. In the end, I wanted to be able to answer the puzzle of why students spend so much time on school clubs when they are also trying to study so as to get into a good university. In the end, I found evidence suggesting that school clubs give students active leadership that make up for the passive dynamics of typical classrooms. For this reason, as well as the ability to overcome various physical hardship, successfully completing school club experience was found to have a positive effect on job hunting in Japan. This thesis became the basis for my first academic publication. Because I was so driven to learn about Japanese culture, one *sempai* (again Agnoek!) introduced me to the possibility of applying for scholarships to pursue graduate studies in the US. However, I had to decide a major. After thinking about it carefully, I decided I was going to apply to anthropology programs, since anthropology emphasizes long-term fieldwork in developing social relations with the people whose culture you try to study.

## 3. Studying Cultural Anthropology in Hawaii

This led me to Hawaii, which has proximity to Japan, lots of good Japanese food, specialists on Japanese culture, and a beautiful green university campus. I ended up staying almost eight years, since I also decided to do my PhD there. A big part of this was the presence of my advisor Christine Yano, a Japanese American anthropologist from Hawaii known for her anthropological research into Japanese popular culture such as *enka* and Hello Kitty. For most of my time, I lived at the East-West Center, an international student community fostering cultural exchange, much like HdB. As the only person from the Netherlands, I was able to join other student community's activities such as Indonesian, Vietnamese, Bangladeshi, as well students from Pacific islands such as Palau and Vanuatu. I participated in their cultural



activities, such as drinking kava and “talking stories”. As an anthropologist, this was an incredibly rich environment, and just like at HdB, I became involved in the student leadership.



Meanwhile, I studied the principles of cultural anthropology, including the methodology of participant observation as developed by Bronislaw Malinowski. His 1922 ethnography, *Argonauts of the Western Pacific*, vividly portrays the culture of the Trobriand Islands near Papua New Guinea, as well as delineates the method of participant observation: participant observation requires

not only observation but active engagement in the culture under study. Researchers must immerse themselves, avoiding frequent returns to their own cultural comfort zones, to build trust and acquire local language



and cultural knowledge. Mistakes are inevitable and require repeated corrections from locals, but researchers should act without embarrassment, gradually socializing over an extended period. Using local language and concepts—not external ones—is essential for analysis and interpretation. Unlike traditional scientific perspectives that emphasize objectivity and detachment, anthropology acknowledges that researchers inevitably influence and are influenced by their subjects. This transformation is not a drawback but a valuable tool for the research process. Ultimately, participant observation aims to dissolve the binary between researcher and participant, achieving a balance between insider and outsider perspectives. Thus, rather than criticizing or judging unfamiliar ways of life, cultural anthropology seeks to contextualize and explain them.

### 3. Social Research on Online Games

This brings me to my current research project, which applies these methodological insights to the phenomenon that sparked my interest in Japanese culture from the start: Japanese video games. While there is some quantitative research on players of games in Japan, there is little

qualitative research. As a result, while we know things like how often and for how many hours people play, we don't know as much about why they play and what is the nature of the world they find there. Related to this is the tendency to talk about "games" in a generalized way, "if you play games, you will...", both in negative and positive ways. This kind of generalized talk about games fails to consider the vast diversity of types and genres of games, as well as the different people who play them. As a result, people who play games tend to emphasize the benefits, and those who don't emphasize the negatives. While games can be associated with improved motor skills and dealing with negative emotions, they are also associated with violence and your brain "going bad". This is emphasized by mixed messaging such as the WHO simultaneously warning against gaming disorder, while also promoting games as a way to stay safely connected to each other during the pandemic. Naturally, people who don't play games often only emphasize the former, while people who do play games only mention the latter. This makes the gap between those who play and those who don't even larger.

I propose using cultural anthropology to bridge these gaps and foster dialogue between players and non-players. Video game worlds and cultures share a commonality with those of the Pacific Islands: both have often been viewed as "other" and exotic, observed from an outsider's perspective. One crucial difference is that we don't necessarily know where or who the players are. They could be your sibling, neighbor, or colleague. Yet, they tend to be described as socially awkward, male geeks or *otaku*. Participant observation can help with such stereotypes by providing a more realistic depiction that shows how what they do makes sense on their own terms. Moreover, unlike broadcast media, video games fundamentally differ in that each user's input shapes the gaming experience, creating a dynamic interaction between game rules and player actions. This makes participant observation, which emphasizes active engagement, particularly relevant in studying video games. *Boellstorff et al.'s Ethnography and Virtual Worlds* (2012) argues that participant observation can be fluidly adapted to virtual environments. So, this is what I did for my dissertation project: focus on one popular online game-world, *Final Fantasy XIV*, to explore its culture.

Within that game, I joined one Japanese gaming community while documenting my observations and conversations. Since there were also offline manifestations and meet-ups between players, I moved to Tokyo for much of this fieldwork. Overall, I found a diverse, vibrant player community interested in connecting with those who are different. Many players are older than I expected, late 20s and 30s, and they don't use games to quit school, family, or work activities, but often integrate them or use the game to support such institutions. Some in-game communities were even reserved for those with full-time, working jobs, and players could often be heard talking about how the few hours playing the game helps them unwind from busy jobs. Players often talked about everyday topics, yet also engaged in serious discussions about relationships, work, and physical health. In this way, the game-world became a kind of third place beyond just an entertainment medium.

Another finding was the high number of female players, who enjoyed fulfilling leadership roles such as group leader and event organizer. Unlike in the physical world, it is fun for women to explore a fantasy world in which vulnerabilities are evenly distributed across gender, unlike in the physical world. Related to this diversity in player gender is the commonality of inter-player romantic relationships to develop, supported by in-game features such as wedding ceremonies. One of my conclusions is therefore that players of games such as the one I studied are not escaping society but instead looking to create society in a way that is safe, accessible, and engaging. After a postdoc at Harvard University, I started researching and teaching at Doshisha on these topics. Therefore, a pursuit and curiosity on these topics led me back to Kyoto.

#### 4. Conclusion

This was just a short preview of my research and how it brings together perspectives on cultural anthropology, digital games, and Japanese culture. I hope to publish a book on this topic soon. However, I want to emphasize that none of this would be possible without the many chance encounters I've had that led me here, including my time at HdB. If anybody has any interest in cultural anthropology or questions about my research on Japanese games, please get in touch as I am always happy to hear from fellow house residents and alumni.



講演会での Mattias 氏

## Let's think of a title together here

Workshop Toban

Erika Nakano

Faculty of Science, Kyoto Sangyo University

Nguyen Bich Ngoc (Jade)

Global Environmental Program, Graduate University for Advanced Studies (SOKENDAI)

Kota Nomura

Faculty of Economics, Kyoto University

HdB is somewhat a student-run dormitory. In HdB, the residents take on different “roles” and choose to be members of a “toban” that contributes to HdB as a whole. There was once a Workshop Toban during the Spring Semester 2024 (April-September, 2024), consisting of Kota, Erika, and Jade.

Initially, we had to present something after each common meal and do a big presentation for OM 会. Yet, the three of us wanted to make the “compulsory” workshops more fun for everyone and that it wouldn't be just the three of us as presenters all the time. That's why we opened the workshop up for others to share their ideas, and we as the Workshop toban would help develop their ideas and facilitate. As a result, we did a drawing (Orane's idea) and a debate session (Jack's idea). It was the first time for most residents to ever draw or debate.

We tried to draw a cow from memory and then from a photo online.



This picture was drawn by Orane. The cow's name is not Orane but, in fact, Alvin.

The debate topics that were thought of but not debated during the workshop.



It is hung in the lobby so that residents can casually discuss them if they are interested.

[Erika]

I belong to a volunteer group at the university's astronomical observatory. As part of my activities, I often give presentations on the principles of observation. Participating in the OM 会 was a great opportunity to share my field, astronomy, with both those interested in space and those who may not be, as people rarely have the chance to visit astronomical observatories. For the event, I presented one of my usual topics from the observatory, and I'd like to share the story here as well.



In my presentation, I guided the audience through an experiment on spectroscopy, a method used to observe celestial bodies. Light is a wave, and its color depends on its wavelength. In spectroscopy, light is separated into a spectrum of colors, like a rainbow, based on its wavelength. Using a diffraction(回折) sheet, the audience observed

the spectra of three types of light sources: hydrogen, helium, and neon. I hope they noticed that each element produces a unique pattern of colors. This principle is fundamental in astronomy. For example, the light from stars can also be analyzed using spectroscopy. By comparing the spectral patterns of various elements with the spectrum of a star, you can determine the materials present in the star. With a spectrometer—a device used in spectroscopy—attached to a telescope, you can gather this information from Earth without needing to physically visit the stars. Even space probes don't need to travel to the stars for this purpose. Spectroscopy has other applications as well. For instance, it can reveal how fast a planet's clouds are moving or the velocity of stars. Thanks to spectroscopy, we can obtain a wealth of information about space. Koyama Astronomical Observatory, where I volunteer, has developed a highly accurate spectrometer capable of dividing light into 20,000 distinct colors. You can see this in action during our stargazing events, held twice a month. If you're interested, you can reserve a spot through the observatory's website.

In summary, spectroscopy allows us to identify the materials in stars and measure the movement of celestial bodies. After my presentation, U-san and the former House Parents

visited the observatory and joined one of our events. It was wonderful to meet them there. Thank you so much!



[Jade]

For my presentation at the OM 会, I did an interactive session together with all the participants called “Our ecosystem” where I asked the participants about what different “ecosystems” components mean to them. They expressed their thoughts via words or drawings on the posters hung around the venue all together, then we all took a look at what we had collectively “said”. Below are the photos of what were “said” during the workshop I did, in no particular order.



I remember getting so nervous I could barely breathe and utter a sound. I remember I already got so nervous before my presentation that my hands went cold and I had to hug my friend Selma during the event until it was my turn. When it was my turn to finally “present”, I facilitated the workshop in English; Kota helped me to translate what I said into Japanese. When the instruction was given out and there was no need for translation anymore, Kota asked me if he should leave and I looked at him thinking I could almost burst into tears because of

the stress, saying, “no, can you please stay with me”.

But do you know what is funny? That it was all in my head and my heart. To the participants and everyone else in the room, they told me that I shone and I looked so confident “on stage”, which was very interesting to me.

[Kota]

For this year’s presentation, I took a slightly different approach. Initially, I wasn’t sure what to present, but House Mother suggested I demonstrate DJing. I brought my DJ controller and other equipment and showcased how to DJ in front of the audience.

First, I gave an introductory explanation about DJing, and then I demonstrated a DJ technique called transition and mashup using the controller. Later, I invited some volunteers to try it themselves.



It was a great opportunity to practice public speaking, and I felt very happy that evening when everyone complimented me during the Nomikai at the House Parents’ room.

After we had done with all of our responsibility for the Workshop Toban, Yuuko-san treated us to Takoyaki to celebrate afterwards. We ate so many kinds of Takoyaki with some other dormmates in HdB. We were all so very proud of the three of us as a toban and individually.

# 京都国際学生の家(HdB)在寮記

川野 家稔

(元日立製作所、19610M)

## 1. 執筆の経緯

2024年3月、京都大学電気系学科の60周年最後の同窓会が開かれたので参加し、その足で、1965年に開設され、一年間お世話になった京都国際学生の家(Haus der Begegnung、以下HdBと略す)へも訪問させて頂きました。当時HdBにて一緒に過ごした内海理事長や村田評議員さんと歓談させて頂きました。その際HdBでの在寮経験を友人などに紹介していた資料をお見せしたところ、内海理事長より市民公開講演会で是非紹介をするよう依頼され、2024年6月29日に京都教育文化センターにて解説させて頂きました。以下はその内容をまとめたものです。

## 2. 入寮への経緯

入寮の発端は、HdB開設の前年、私の指導教官であり、以前にHdB設立者のコーラー博士と交流のあった電子工学科の矢島先生から、「来年HdBが開設されるので、入って見ないか」、とお誘いを頂いたのが発端です。コーラー先生は以前に同志社大学の客員教授として在京され、異国である日本の学生と交流することに意義を感じられ、まず、スイスのチューリッヒにチューリッヒ国際学生の家を作られたとのこと。この結果を踏まえSEAM(Swiss East Asia Mission スイス東アジアミッション)から資金拠出を受け、京都にも国際学生の家を作りつつある、との矢島先生のお話でした。その時に私は「東アジアミッションから資金拠出を受けているということはキリスト教の布教の目的では?」、と矢島先生にお聞きをしました。私の母はクリスチャンの家でしたので、キリスト教に違和感はありませんでしたが、我が家は仏教の家でしたので、確認したままでした。矢島先生は、「コーラー先生は絶対にそんなことはなさらない、私が保証する」、と仰って頂いたので、入寮させて頂くことにしました。

## 3. HdB設立への道

コーラー先生の発想でスタートを切ったHdBですが、具体的な設立過程には何と云っても日本側の当時京都大学化学研究所所長をしておられた稲垣博先生のご尽力が大きかったと思われます。稲垣先生は若い頃、偶々広島への原爆投下の直後にその惨状を目撃され、平和に対する強い気持ちをお持ちになっておられ、ドイツへの留学中にコーラー先生と面識を得、その平和に対する思いに共鳴され、交流を深められ、コーラー先生のHdB設立の発想に共鳴され、日本でのHdB設立具体化に協力、邁進されたようです。実際HdB京都開設式でのコーラー先生のご挨拶の中でも、自分はスイスに居たままで、具体化に至る幾多の実務は稲垣先生の御努力によるものだ、という感謝の挨拶をして居られました。



#### 4. 理念、目的、具体的活動

HdB の理念は国籍、言語、宗教など異文化の学生同士の交流の中から共生体験を学ぶ、ということに尽きると思われます。自分の意見を主張すると同時に、相手の立場も理解をする、いわば異文化への対峙を経験する道場とってよいのでは、と思われます。

この為の生活上の活動としては、Common Meal と称する週一回の合同夕食後、共通のテーマを全員で討議する場が一番大きな活動でした。当時は標準言語の決まりもなく、話す人によって言語も異なる珍しい会議でした。最近では主言語として英語と日本語に決められているようですが、当時は全く自由で、どうしても多言語を話せる人の発言力が強くなっていったように感じました。また、無理に結論を出すことは求められず、自由に発言できる場でもありました。議論をする過程で、個々の参加者が異なる意見に対峙することを体験させるのが主旨であったと思われます。この対峙経験の積分が世界平和への道に通じるというコーラー、稲垣両先生の願いであったと思われます。その他の活動としては、各国の学生が準備をする世界の料理パーティーや来客による講演会などもありました。

#### 5. 体験、学んだこと

初めて多くの外国人と一緒に生活をするという経験から学んだことの大きなものは、我々日本人があまり行わない自己主張をすることの大切さ、だと思ひます。

特に島国で外国と陸続きで接していない我々日本人は同一基盤の発想をしていることが多く、意見が合っているのが当たり前感覚が強いように感じます(Homogeneous 民族)。他方、特に陸続きの国で育った外国人は外国人との接触機会も多く、意見が異なっているのが当たり前(Heterogeneous 民族)の世界で育って居る、ということを感じます。

日本人同士であれば意見が異なると何か緊張感といったものを感じますが、外国人との間では意見が異なるのが当たり前で、意見相違があっても人間関係の悪化は無く、むしろ相手の考えがはっきり判って関係が改善することも多い、ことを感じました。

#### 6. 皆様への期待

折角遠い海外から日本文化の中心である京都へ留学などで来られて居られる方が多いので、この機会に日本文化を体験して頂く機会を作っていただければ、と思ひます。京都には日本文化に接する材料が沢山あるので、これを海外の皆さんに体験して頂ける機会を作っていただければ、と感じます。また、京都には世界に誇れる企業も多くありますので、これらの情報を海外の皆さんにお伝えする機会なども作って頂ければ海外からのレジデントには喜ばれるのでは、と思われますし、企業にとっても海外へのPRの機会になるのではとも考えます。

#### 7. 最後に

HdB 卒業後、40年近く経った2003年、機会がありコーラー先生夫人のネリーさん、お嬢様のキャサリンさんとスイスのチューリッヒでお逢いする機会がありました。

残念ながらコーラー先生はお亡くなりになって居られましたが、コーラー夫人は40年経っても日本語でお話をして頂きました。

多感な学生時代に貴重な体験をさせて頂き、その後の社会生活でも海外との交流に大変役立ちました。この環境を提供頂いたコーラー、稲垣両先生を始めご家族、スタッフの皆様に心からお礼を申し上げたいと思います。



講演会での川野氏



## 【OM 便り】

### あれから 55 年

小島 和典 (KOJIMA KAZUNORI)

(建築設計士 1970OM)

私は OM の小島です。1970 年頃、学生生活の最後に 1 年間「国際学生の家 (HdB)」にレジデントとして滞在していました。

先日、大学の同窓会の折り、55 年ぶりに HdB を再訪し、事務担当の村田さんとハウスペアレントの中久木さんにお会いすることができました。突然の訪問にもかかわらず、快く受け入れていただき、ラウンジで昔話に花が咲き、楽しい時間を過ごさせていただきました。

目の前に間口いっぱい広がる緑の庭、昔懐かしいバーカウンター、そして、ピアノ、卓球台等、55 年ぶりのラウンジは、古さが目立ちましたが、昔のことをとても懐かしく思い出させてくれました。

今、レジデントの半数が女性とのこと。私が滞在していた頃は、男性だけでしたので、隔世の感があります。しかしコモンミールの時に出された各国の「男飯」は魅力的で、初めて食べたエスニック料理には魅了されました。

又、当時スカラーで滞在しておられたベトナムのご夫婦とご一緒した時、ご夫婦の姓が違っているのにびっくりしました。日本では今、夫婦別姓の是非が話題になっていますが、50 数年前に既に夫婦別姓が採用されていたという事実におどろかされます。もしかすると、随分昔から、夫婦別姓が世界の常識だったのかもしれませんが。このように、HdB での海外の留学生の方との直接的な交流は、私にとっては初めての経験で、驚きの連続でした。

1970 年は日本で初めての国際博覧会「EXPO70(大阪万博)」が開催された年でした。海外パビリオンでの展示やデモンストレーションを通して様々な情報に触れ、多くの外国の人々と接することにより、日本人にとって海外が身近な存在となりました。一般の日本人が海外の人々と情報に直接触れることができるエポックメイキングな出来事だったと思います。

このような状況の中、私にとっても海外に出ることが夢ではなく、実際の行動となりました。HdB での雰囲気や背中を押されたこともあり、1970 年から 1971 年にかけて約 2 ヶ月間のヨーロッパ放浪の旅に出ました。修士論文のテーマ探しと言う大義名分

はありましたが、実際はHdBの皆さんから見聞きしたことを実際に体験してみたいという想いが大きかったように思います。確かに「見ると聞くとは大違い。」初めて経験する海外生活と私自身の若い感受性のせいもあって、異なった文化・環境の中で「見ること聞くこと」すべてが新鮮で多くの発見がありました。

ヨーロッパでの体験と思索は、帰国後修士論文「経験としての街—ヨーロッパ諸都市におけるある考察」にまとめました。



1970年 ヨーロッパ放浪中

大学院を卒業して、建設会社の東京本社で、建築設計の仕事に従事しました。日本国内でのプロジェクトがほとんどでしたが、比較的海外でのプロジェクトを任されたのも、学生の頃の経験が実を結んだものと思われます。特にシンガポール日本人学校のプロジェクトでは、日本企業の海外進出の時期と重なり、毎年増え続ける日本人家族に対応するため、十数年にわたり増築を繰り返しました。



シンガポール日本人学校

定年まで東京で過ごし、その後、実家のある名古屋に戻りました。名古屋に来てから20年近くが経過し、今では両親も他界し、子供たちも独立しています。そのため部屋が比較的空いています。ご縁のあったHdBのレジデントの方が名古屋に来られる時にはぜひお立ち寄りください。私たち夫婦も歳を重ねてきましたので、長期滞在は無理ですが、ホストファミリーとして1, 2名の方の2, 3泊のお世話は可能です。

ご希望の方は村田さん、中久木さんにお問い合わせください。

## 吾心安処是故郷

(此の心の安らかなる処は吾が郷なり)

湯夢佳(とう・ゆめか) (中国)  
(20180M)

### 1. 「学生の家」から社会へ — 文化芸術を伝え、つなぐ担い手に

私は2018年の春に京都造形芸術大学の日本画専攻に入学して、同時にHdBのレジデントにもなりました。楽しい2年間の寮生活を送って、2020年の春に卒業しました。満開の桜の木の下で、私は自分の振袖姿を見ながら、自分はどんな感じの社会人になるかと考えていました。

新型コロナの影響を受けて、私の帰国の便が何回もキャンセルされて、その都度、HdBにお世話になりました。2020年の4月の下旬に、私はやっと帰国して、上海のホテルで隔離されている間にオンラインで就職活動をしていました。そして、5月に華東師範大学第二附属高校に入職して、主な仕事の内容は「美育」を通じて進学校の学生さん達の心を豊かにすることです。

私は学校の入学証明書をデザインする時、古い絵の復元模写の勉強で身につけてきた東洋美意識を大切にして、上海の都会生活の雰囲気も含まれ、伝統美とモダンが融和したデザイン作品を作りました。それは社会的に高く評価されて、人民日報に掲載されました。



私は社会人として上海での生活は初めてで、周囲に知人もいない、新型コロナの影響で新しい友達を作るチャンスも少なかったです。新しい社会人としてのストレスが貯まって、一人で困難な時期を乗り越える孤独な生活を送っていました。

### 2. 巣立ち後、いつでも帰っていい — 「心の家」に届く

うちの学校には美術担当の先生は私一人しかいない、デザインや芸術展示会をする時、どうすれば上手く伝統とモダンが織りなす美しさを学生さん達に伝えることができるのか、自分で考えないといけません。多様な文化の衝突と融合によって「魔性の上海」の人々はモダンアートを理解し、楽しんで頂けるので、私は上海で独自の芸術スタイルで色んな作品を作ってみんなに発信したいです。

2023年になって渡航制限が緩和されたことで、私は夏休みの時HdBに泊まって、草月流(自由で前衛的な作風を特徴とする生花の流派)を習いました。そして当時のレジデント達と出会い、山本夏子さん(当時のhouse mother)と一緒にHdBの庭に自生する花材を使って生花の練習をしまして、寮生の為にlobbyの飾りにしました。また夏さんにい

ただいたわかめスープが好きになりました。上海に帰って、仕事で疲れた時にわかめスープを飲むと、HdBのことを思い出して、落ち着きます。

私は2018年の時から、自分は社会人になるとHdBの為に何かできるのかを考えています。今は素晴らしい仕事に巡り会っていて、感謝な気持ちを持ちながら精一杯頑張っています。

### 3. 「人とのつながり」で — クリエイティブを切り開く力に

私は2024年の夏休みに、7月に東京に行ったり京都に行ったりしながら、OM達と一緒に写真撮影とかアート展示会巡りとかをしました。8月には山本夫婦と一緒に上海に帰って、江南水郷の世界遺産の旅をしました。一カ月間でHdB関係者の皆様に囲まれて、意義深い、心のエネルギーチャージになる夏休み生活を送ることができました。

9月、私は学校で学生さん達の顔を見て、同僚達の仕事姿を見て、みんなかわいいなあと思うようになりました。かわいいみんなの為に働いて幸せだと思います。

11月にはアート展示会を企画する時、私はインスピレーションなかなか出て来なくて困る場合がある、学生さん達は色々な素晴らしい発想を提案してくれて、同僚達も忙しい中で協力してくれました。おかげ様で私は一人の力では困難な大規模のモダンアート展示会が主催できました。私は社会人になって四年目に、初めて一人暮らしから共同生活の暮らしへ進みたくなりました。



### 4. 自ら舞い、謡う — 「芸術の心」にフォーカス

今、私は夏子さんの家でYearbookの原稿を書いています。おかげ様で私は日本人の家庭生活体験をしています。昨日はHdBの新旧レジデント達が集まり、皮から餃子を作りました。食事後、みんなで楽器を演奏しながら歌を歌い、国籍と言葉のバウンダリーを乗り越えて、音楽でみんなの心が一つになっていました。

今日はいつもHdBを応援して、寄付してくださっている真木さんご夫婦の家を訪問しました。奥様は私の美術分野の大先輩で、女子美術大学を卒業してから60年以上アーティストとして活動されています。ご主人は奥様の芸術才能を大切に、応援されています。真木さん夫婦は私が憧れているご夫婦の姿を具現化しています。このようなお互いのことを支え合う結婚相手はきっと未知なところで私を待っています。

### まとめ

HdBは1965年からいろんな方に支えられて、今日まで日本人学生と外国人留学生の出会いの家として活動してきました。新旧寮生はこの家に守られて、この家で異文化交流がもたらす成長と新たな視点を得ることができます。HdBの夢の継承者のみなさんは、ぜひ京都を散歩して、お互いのことを家族として考えて、多様な価値観に触れ、柔軟な思考力を養うことで、グローバルな視点を持つようになってください。

## タイへの日本語指導員派遣 —レジデントの国際交流体験—

村田翼夫

(HdB 評議員、Year Book 編集委員長、筑波大学名誉教授、1965OM)

2024年の7月～9月にかけてタイの職業カレッジ、大学や中等学校へ日本語指導員の派遣プログラムを実施した。派遣したのは6名であったが、その中に「京都国際学生の家」の留学生レジデント1名と元レジデント（日本人）1名が加わっていた。

この派遣プログラムは、私が大学教員をしていた頃から長期間にわたり続けてきたものである。最初は、筑波大学の助教授であった時に、元留学生の要望に基づきタイのカセサート大学附属中等学校へ約1ヶ月間学生を派遣した。この派遣は私の退職後も継続され30年余り続いた。同プログラムの評判がよくて、その後、チュラロンコン大学附属中等学校（主に大阪成蹊大学学生）やチェンマイ大学附属中等学校（主に京都女子大学学生）からも要望が来て学生派遣を行った。チェンマイ大学附属中等学校への派遣は8年間も続いたが、校長が交代すると中国語に力点を置くという方針で、2012年に廃止となった。

今回はまず、2018年、2023年に続けて私立の職業カレッジ（バンコクとアユタヤ）へ4名のメンバーを派遣した。その中に、2年前までハウスのレジデントであった浅井裕理さんも加わった。彼女は一昨年からはモンゴルの首都にある新モンゴル工科大学と友ランゲージアカデミーウランバートル校で日本語教師となっている。他は、主婦、銀行員、福島大学の教員（植田啓嗣先生）であった。もう一つのプログラムは、スコータイにある私立中等学校（ウドムダルニー校）とナレスアン大学文学部の日本語科へ行くものであった。これにペルーのレジデントである Mr. Carlos Anthony が参加してくれた。また、東京にある桐朋女子高等学校教員の吉崎亜由美さんがご主人と一緒に同行して下さった。

私立職業カレッジでは、日本語教育は正規科目になっていなくて臨時的に教えるものであり、基本的に初級レベルの日本語教育である。浅井さんによれば、授業の内容は、主に基本的なあいさつ、基本語彙、自己紹介、および会話であった。カレッジより「会話を教えて欲しい」という要望があったので、学生に一人ずつ話させせる工夫をした。さらに、授業の最後にペアで前に出て話しをさせたという。これが大変盛り上がったとのことであった。主婦である後藤まみさんは、得意の三味線を持参して授業の終わりころに演奏し、学生たちは喜んでいたそうです。

他方、スコータイの私立中等学校、ナレスアン大学日本語科では、日本語は正規科目になっている。同中等学校では、初級の上から中級レベル、大学の日本語科は中級～上級レベルの内容であった。吉崎先生の場合、日本語会話、折り紙に加え、沖縄の言語や世界について教えると共に、タイの世界遺産について調べて日本語で発表して

もらった。また、折り紙で兜を折った後で侍の説明、鶴を折った後で平和のシンボルと関連付けつつ広島の説明も行ったとのことである。

Anthony 君は、英語も上手なので英語の指導も行った。生徒たちに日本語学習の動機を聞くと、日本のアニメ、コスプレ、ゲームなどに興味を持ったとのことであった。日本語指導では、日本文の読み方、漢字の書き方、ドラエモンの歌（意味の紹介も）、ジャンケン遊びや、日本における留学生としての経験の語り、ペルー文化の紹介などを行った。ナレスアン大学の日本語科の学生には、ペルー文化（スポーツ、料理、音楽、言語など）の話をして、その内容を日本語まとめてもらう学習を課した。また、学生達とサンサ・ダンスを楽しんだ。彼は、生徒・学生達に大変人気で歓迎された。帰国する時、持ち帰れないほどの土産をもらったそうである。

なお、ご兩人とも生徒や先生方にスコータイ遺跡、ピサヌロークの有名寺院などを案内してもらってタイ文化の理解を深めている。

昨年11月8日（金）におけるハウスのコモン・ミールの際に後藤さんが新潟からいらっしゃって参加され、途中で三味線演奏をしてくださった。翌日の午後には、タイ日本語指導報告会をハウスのラウンジで行い、後藤さん、Anthony 君が経験を発表した。その他、チェンマイ大学附属高校で京女大生から日本語指導を受け、アジア太平洋大学を卒業した Bien さんも出席して、日本語指導を受けた側の立場から感想を話してくれた。彼女は、当時、オーストラリアのタスマニア島で働いているのでその経験も話題にした。参加者は10人程度であった。

今回のプログラムには、ハウスの関係者は二人のみであった。タイへ日本語指導に行きたいというレジデントは何人もいたが、日程が合わず断念した方が多かった。職業カレッジやスコータイの中等学校から2025年にも日本語指導員を派遣して欲しいという要望が来ている。またのチャンスに応募して意義深い国際交流、異文化理解の直接体験をしてもらえれば嬉しく思う。



後藤さん：カルタ取りおよび三味線指導





浅井さん：カレッジの学生および教員たちと



アンソニー君：中等学校の教員達から  
花束の歓迎、



ナレスアン大学の学生指導

## 扉の向こう

辻本 圭助

(経済産業省大臣官房福島復興推進グループ長、1990M)

1990年春、HdBの一員となった。それまでの4年間は鞍馬の山中にある大分県京都学生寮住まいだったため、特に深い考えもなく、多少大学に近い所に住もうと思ったのが理由。何の先入観もなく、扉を開けた先は、23才の自分にとって異次元の世界であった。

まず、建物の作りからして不思議な空間、何故一階ロビー奥にキッチンがあるのか、その意味はコモンミールで味わうことになる。皆が順番に自らの故郷、多種多様な歴史を背負った料理を作り、暇な人が手伝い、振る舞い、食を共にする。コモンミールは単なる食事会ではない、食を通して、異文化を共有するための機会だった。

また、異なる文化や歴史を背景とするレジデント達との邂逅は実に刺激的、ハウスの運営に関して、皆が真剣に語り合い、意見をぶつけた毎週一回のhouse meetingは、confront, conflict & consensusを学ぶ場、皆が主義と主張を持ち、時として議論は深夜に及んだ。レジデントにとって微妙なテーマでもある宗教(カソリック、プロテスタント、イスラム、仏教等々)についても、歴史(戦前/戦後のアジア等々)についても、夜な夜な語り合いは続き、何時しか、HdBの空間と時間が自分の生活の中心となっていくた。

多様性といった言葉が世間一般的で無い時代、出会いの家HdB(Haus der Begegnung)は、Dr. Werner Kohlerの設計思想通り、多様性に満ちあふれていた。

今思えばまるで桃源郷のような2年間を経て、働く場として選んだのは、政府の機関である通商産業省。HdBから受けた刺激のおかげか、25才の私は、全く大学で学んだこととは違う世界の扉を開けてみたいと思ったようである。

その後、海外に仕事で数年間在住することになったが、元々海外生活に無縁であった自分にとって、HdBでの経験は何よりも多くの糧となっていた。東日本大震災後に3年間赴任したカナダ時代では、エネルギーの確保に窮していた日本として、如何にして北米からの天然ガス/シェールガスを新たに確保するかが至上命題であったところ、カナダの地では、First Nationと呼ばれる先住民との対話/扉を開けることが第一歩

であった。彼らにとってみれば、日本人と直接出会うのは初めて。昼間の会議だけではなく、食を通して、異文化を共有する（私なりの）コモンミールを重ねることで、お互いの距離が縮まってくれたと思っている。

大規模災害が世界中で絶えない中、日本でも、東日本大震災、西日本豪雨、北海道胆振東部地震、昨年の能登半島地震と数多くの災害に見舞われており、最近では経済産業省の危機管理の責任者として、これら災害の復旧/復興に携わってきた。災害の被害は千差万別、そこに居住されている方々の文化や地域の多様性を意識しながら、復興を考えていきたいと思っている。

ハウスを出て30余年が経とうとしているが、振り返れば、これまでの人生で最も濃密な記憶が残る2年間であったし、HdBで教わった「出会いの場」が持つ意味は深淵であった。

今レジデントとして、HdBでの空間と時間を共にしている皆さんが、今自分がある種の桃源郷に居ることを存分に楽しんで頂き、その体験を糧に、これからも次々と新しい扉を開けていくことを、あの空間を共有した身として嬉しく思っている。



British Columbia 州の Cristy Clark 首相とのツーショット  
(2013年7月)

## HdB は『出逢い』の壮大な実験場！？

岩崎 隆二

(HdB 顧問、元評議員、元常務理事、和晃技研(株)代表取締役社長、1969OM)

- ★ 奇跡の再会：創設者コーラ博士曰く「池に投じた1個の石の波紋は世界に通じる」  
2023年11月、HdBの感謝祭で20年振りに張静さんから声を掛けられた時に、チナーラさんの消息を尋ねたところ、直に連絡が取れ、チナーラさんは21年振りにベトナムから移住し、当社に入社して大活躍をするという結果になった。  
本来、張静さんとチナーラさんとは面識はない筈なのに、その謎はまた次回お会いした時にでも。兎に角、HdBの行事が取り持つ縁であることは間違いなく、今後とも、永遠に存続することを願っている。

- ☆ 留学生時代のチナーラさん（HdB 2002年～2003年、キルギス）



祇園のライブハウスの舞台上で。京大留学中の可憐だったころ。2003年9月

- ☆ お帰りなさい！チナーラさん その奇跡の日が23年振りにやって来た。



キルギス帽子「カルバック」着用

敏腕 Marketing Specialist として、可憐さは消え、すごみを増して再登場！

## 相縁奇縁

チナーラ・アブディカディロワ (Chinara Abdykadyrova) (キルギス)  
(2002OM)

私が初めて HdB に来たのは 2002 年 10 月でした。19 歳で家を離れて初めての海外生活でした。国際学生の家で多国籍の学生たちと出会って、20 年以上経った今でも友達関係を保って、私の人生の一部を形成する宝物だとも言えます。

HdB で出会ったベトナム出身のフクと結婚し、2005 年に京都で長男が生まれました。長男の誕生を機に、HdB の庭でレジデントの皆様から贈り物として樹を植えてもらいました。



2005 年 3 月・ゆずの木を植えた日



2025 年 2 月・ゆずの木の様子

2024 年 11 月に 19 年振りに HdB の国際フードフェスティバル・感謝祭に行った時にとっても懐かしく、樹が大きくなっていたのを見て、びっくりしました。

そして、2024 年 12 月にコモンミールに招待いただき、21 年振りにレジデントの皆様が作った料理を楽しみました。昔レジデントだった自分が皆と料理を作って、お客さんを迎える準備でバタバタしていた様子が目に浮かび、泣きそうになりました。

いつか長男と次男も HdB に住んで、親が経験したことを自分でも経験し、彼らの人生の宝物になるような出会いがありますようにと母親、そして OG として心より願っています。

2025 年 1 月のコモンミール  
岩崎社長&ミャンマー出身の同僚と一緒に



【ハウスペアレンツとレジデントより】



From April 2024 to January 2025

Drawing our time at HdB

Le Saout Orane (France)

Kyoto University, Faculty of Economics

## Our Official-Unofficial Event Schedule

Yuko Nakakuki (HM)

### *Spring Semester*      *[Team Members : Ayano, Anli, Damian, Yuta]*

- 05/04/2024 Welcome Party (+ First House Meeting)**
- 19/04/2024 Common Meal 1**
- 26/04/2024 First Potluck Party
- 03/05/2024 Open House Party
- 24/05/2024 Common Meal 2 + Workshop (Drawing)**
- 08/06/2024 One Day Trip (Kobe)**
- 29/06/2024 OM会 (Erika, Jade, Kota-Presentation) + Common Meal 3**
- 12/07/2024 Common Meal 4 (Yukata 浴衣 Common Meal)+Workshop (Debate)**
- 03/08/2024 Big Cleaning**
- 09/08/2024 Common Meal 5 (+Last House Meeting)**
- 18/08/2024 お盆 BBQ Party in HdB Garden
- 31/08/2024 吉田東通り夜市Yoshida Higashi Summer Festival 2024 Participation
- 20/09/2024 Saikyo Junior High School Students Visit
- 28/09/2024 Japanese Garden (with The International Japanese Tea Association)**  
Workshop; Orane's Drawing, Jack's Debate, and OM会

### *Fall Semester*      *[Team Members: Jade, Orane, Kota, Meki]*

- 04/10/2024 Welcome Party (+ First House Meeting)**
- 05/10/2024 Disaster Response Workshop & Evacuation Drill with firemen
- 20/10/2024 Culture Day
- 25/10/2024 Common Meal 1 (+Halloween Party)**
- 08/11/2024 Common Meal 2**
- 16/11/2024 Open House Party
- 08/12/2024 Thanksgiving & International Food Festival (IFF)**
- 14/12/2024 Sports Day
- 28/12/2024 Common Meal 3 (+Christmas Party)**
- 31/12/2024 Nenmatsu Big Cleaning + Toshikoshi Udon (+Hatsumoude)
- 01/01/2025 Japanese New Year (Osechi Workshop by Erika)
- 10/01/2025 Common Meal 4**
- 07/02/2025 Common Meal 5 (+ Last House Meeting)**
- 09/02/2025 Big Cleaning**

\*Every non- common-meal Friday : Potluck Party, Birthday Party, Farewell Party  
 Selma started the Potluck Party, we can bring our own food and drinks, we and friends  
 can participate freely.

\*In the fall semester, a new Safety Toban has been created. Evacuation drill was conducted on their leads.  
 They were so active when the flu epidemic broke out in HdB.

\*We participated in community evacuation drills, the festival and the rice cake making event and  
 interacted with people.

**All events were very successful thanks to the Team’s leadership. I really appreciate their  
 wonderful ability, strength, and personality.**

**Thank you, Supermen and Superwomen, no, my beloved Monsters!!**





**HdB に憧れた少女がハウスマザーになった**  
**A girl who admired HdB became a House Mother**

中久木裕子 (Yuko Nakakuki, HM)

初めてこの寮のロビーに立った時、私は制服を着た女の子でした。ロビーの真ん中に立って眺めた光景は今と同じ。クラシックな家具とカウンター、明るい黄緑色の庭。まるで外国のように感じたことを覚えています。数十年の時を超えて、今私はハウスマザーとして同じ場所に立っています。HdB に私を導いた不思議なご縁の中心には、兄の時代にハウスマザーだった内海博司先生、遠い昔に父や叔父がお世話になったとお聞きしている、かの稲垣先生のお嬢様ご夫妻山本慶一様と夏子様、そして大切な友人であり学寮委員の前川佳世子様の存在があります。もちろん、私の兄岩田忠久と、結婚して京都に来るきっかけとなった夫中久木卓也の存在はその原点です。すべてのご縁に心から感謝しています。ハウスマザーになって少し経った頃、私は大きな3つの気づきによってHdBに憧れる単なるDreamerではいけないという現実を受け入れることになりました。一つは、HdBには、スーパーマンとスーパーウーマンが集っているということです。彼らは分厚い難しい本を片手に料理をして、二か国語以上の語学スキルは当たり前。思いついたアイデアをその場ですぐに実現させます。1のことから100を捉えて理解し、それを完璧な形にします。しびれるのは「Make sense!」と言ってキーボードを打つ姿。ミーティングは鋭い集中力で成果をあげ、最後は「Anything else?」と聞いて見渡して拍手で終わるのです。未だに、彼らの能力に感服する毎日で、実はミーティングの前に、緊張をほぐすため少しアルコールが必要です。そして、2つ目の大切な気付きは、彼らが生身の人間だということです。彼らは、大変優秀であるがゆえに、愛する家族を故郷に置いて、一人でここに来ています。大切な方々を想って切なくなり、賞賛されて嬉しい時があり、そして時々不機嫌なこともあります。彼らはスーパーマンとスーパーウーマンである前に、生身の身体と純粋な心を持つ若者たちでもあります。私にとって彼らは尊敬する怪物だけれど、実は純粋な心を持つ人間で、私は彼らを慈しむ母なのだということです。そして3つ目。これは私の大切な人達が教えてくれました。Kindred Spirit と Belonging。日本語では同胞意識と帰属意識と訳すのでしょうか。超人的な彼らが世界中で活躍するためには、このKindred Spirit と Belonging が非常に大切で、その中心が「HdB」であり、彼らの思い出の中に私は永遠にハウスマザーとして残る存在だということです。私は単なるHdBに憧れる少女から、スーパーマンとスーパーウーマン達の母となり、彼らを慈しんで愛する母になりました。私の愛するスーパーマン、スーパーウーマン達。私はあなた方を常に誇りに思い、心から愛しています。あの時の少女の憧れは、母として

の愛になりました。あの日、私を HdB に連れてきてくれた両親に感謝します。そのおかげで、今私は彼らの母なのですから。感謝と愛を込めて。

When I first stood in the lobby of this dormitory, I was a girl in a uniform. The scene I gazed at from the center of the lobby is the same as it is now. I remember feeling as if I were in a foreign country, with classic furniture, a counter, and a bright light green garden. Decades later, I now stand in the same place as a House Mother. At the center of the mysterious connection that led me to HdB is Mr. Hiroshi Uchiumi, who was a House Father during my brother's time, and the Yamamoto couple, Mr. Keiichi and Mrs. Natsuko, who I have heard took care of my father and uncle a long time ago, along with my dear friend and dormitory committee member, Ms. Kayoko Maekawa. Of course, the presence of my brother, Tadahisa Iwata, and my husband, Takuya Nakakuki, who provided the opportunity for me to come to Kyoto, is the origin of it all. I am sincerely grateful for all these connections. After I became a House Mother, I came to accept the reality that I could no longer be just a Dreamer who admired HdB due to three significant realizations. The first is that HdB is filled with Supermen and Superwomen. They cook with thick, difficult books in one hand, and being fluent in more than two languages is a given. They immediately implement the ideas that come to mind. They grasp and understand 100 things from one, and perfect them. It's electrifying to see them typing on the keyboard while saying, "Make sense!" Meetings yield results with sharp concentration, and they end with a round of applause after asking, "Anything else?" Even now, I am in awe of their abilities, and I actually need a little alcohol before meetings to ease my nerves. The second important realization is that they are real human beings. Because they are exceptionally talented, they have left their beloved families back home and come here alone. They feel a pang of longing for their important ones, experience joy when praised, and sometimes can be in a bad mood. Before being Supermen and Superwomen, they are young people with real bodies and pure hearts. To me, they are admirable beings, but they are also pure-hearted humans, and I am a nurturing mother to them. And the third realization was taught to me by my dear ones: Kindred Spirit and Belonging. For these superhuman individuals to thrive globally, this Kindred Spirit and Belonging are crucial, with the center being "HdB." I will forever remain a House Mother in their memories. I have transformed from a mere girl who admired HdB into a mother of Supermen and Superwomen, loving and cherishing them. My beloved Supermen and Superwomen, I am always proud of you and love you from the bottom of my heart. The admiration of that girl has turned into a mother's love. I am grateful to my parents who brought me to HdB that day. Thanks to them, I am now their mother. With gratitude and love.

## 人生は一言で変わる―「あなたは座っているだけでいいから」

### Life can change with one word - "All you have to do is sitting down" -

中久木卓也 (Takuya Nakakuki, HdB 理事 HF)

「あなたは座っているだけでいいから」と現ハウスマザーである妻に言われて、よくわからないまま、気が付いたらハウスファザーとして HdB に関わり半年以上が過ぎました。おそらく、此処に来ていなかったら、出会うことのない多くのレジデント、関係者の方に、日々、新しい発見や刺激をいただいています。レジデント、ハウスのために日々走り回っているハウスマザーに比べると、本当に、座っているに等しいですが。

人生は、偶然の出会いや、出会った人の些細な一言で、大きく変わっていくということを、こんな私でもいくつも経験し、今の自分があると思っています。小学生の時、私はあまり目立たないタイプでした。いい子になるようなことは大嫌いで、先生がいてもおかまいなしで、しょっちゅう注意され、教室の後ろに立たされる子供でもありました。

ある日、そんな私に担任の先生が、クラスのみんなの前で、「彼は私が見ていないところでもちゃんとやっている。」と話してくれました。それがきっかけで、周りの私を見る目が変わり、ちょっと自分に自信が持てるようになりました。クラスの選挙でも、以前は推薦すらなかったのに、ダントツで学級委員に選ばれるようになりました。この一言がなかったら、いったい自分はどんな人生を歩んでいたのでしょうか。先生には、今でも大変感謝しています。その後も、相変わらず教室の後ろに立たされていましたが。

レジデントの皆さんも、これまでもこれからも色々な出会いがあり、それは HdB でしか得られないものも多いと思います。人生は、偶然の出会いや、出会った人の些細な一言で、大きく変わっていきます。もちろんいいこともあれば悪いこともあり、時に苦勞もするでしょう。私は偉そうなことは言えませんが、新しい環境で戸惑ったり、うまくいかなくて、何をしたらいいかわからなくなった時に、自分自身が思い起こすドラマ・映画のセリフを、皆さんに紹介して締めくくりたいと思います。

“なにがあるか分かんないから元気出るんだよ。”

“今この瞬間のために、いままでのいろんな事があったんだ、ってそんな風に思えるようになる時が来るよ。” 赤名リカ ドラマ “東京ラブストーリー” より

“与えられた時間で、自分が、何ができるか考えることだ”

ガンダルフ 映画 “ロード・オブ・ザ・リング” より

"All you have to do is sitting down" was what my wife, the current house mother, told me, and more than half a year had passed since I started being as a house father at HdB. I make new discoveries and receive inspiration every day from the many residents and people involved who I probably would never have met if I hadn't come here. Compared to the house mothers who run around every day for the residents and the house, I'm really just sitting there.

Life can change dramatically with chance encounters and a trivial word from someone you meet, and I believe that this is what has made me who I am today. When I was in elementary school, I wasn't the type to stand out much. I hated being a good kid, and I was always being scolded and made to stand at the back of the classroom, regardless of whether the teacher was there or not.

One day, my homeroom teacher said to me in front of the whole class, "He does his best even when I'm not looking." That experience changed the way people around me looked at me, and I started to have a little more confidence in myself. Even in class elections, I was elected as class representative by a large margin, even though I had not been recommended before. What kind of life would I have lived without that one word? I am still very grateful to the teacher. After that, I was still standing at the back of the classroom.

All of you residents have had and will continue to have many encounters, many of which you can only get at HdB. Life can change greatly through chance encounters or a trivial word from someone you meet. Of course, there are good things and bad things, and sometimes you will have difficulties. I can't say anything arrogant, but I would like to conclude by introducing to you a line from a drama that I remember myself when I am confused in a new environment, things are not going well, or I am having a hard time.

**"You don't know what's going to happen, that's what keeps you going."**

**"You will be able to feel that all the things that have happened up until now have been for this moment."**

**By Rika Akana from "Tokyo Love Story"**

**"All you have to decide is what to do with the time that is given to you"**

**By Gandalf from "The Lord of the Rings"**

## **First Night at HdB**

Adhistry Larasati (Indonesia)

Graduate School of Agriculture, Kyoto University

A little fun fact about me, my name is Adhistry Larasati but I am called Nana, and the reason for that is simply because I adore the actress Komatsu Nana, and so I adopted that name as my nickname to be used by everyone. This is my first ever experience in Japan, no, abroad. Coming into a whole new country to me was filled with a lot of emotions, from fear, joy, sadness, and confusion. Each and every feeling mingle and come together as one, that the first time I stepped onto the airplane, I cried. I thought, “Finally, I am riding on an airplane, finally I am going abroad!”. The joy of it all intensifies even more when I arrived at HdB. At first, I was nervous whether I would be able to adapt and blend in with everyone at the dorm, but surprisingly just one week into the dorm and I am already making lots of friends! It really touches my heart how nice and lovely people are in here.

However, there is one incident that I will never forget as one of my most memorable moment of moving in to HdB, and that is when I lost the key to my luggage. Just the night when my mother and sister are finally leaving, I went to open my luggage for some change of clothes, however lo and behold the keys are gone. Therefore, I went and knock on the house parents’ door at 9 pm and there Yuko-san, the house mother (HM), had saved my life. First, we went into my room and face my locked suitcase. I suggested a hammer, smashing it against the lock for it to be open, and so we tried in turn, but to our surprise this lock has a lot more than just nine lives, it was impossible to open. The HM tried to call the lock opening company, but as I was surfing the internet, I found pictures of bolt cutters, which gave me an idea. I asked the HM if we have one here, she said we do and a few minutes later came back with one. She did the honor of opening the lock because the tool seems dangerous. And there, the lock was opened! Clean cut! I felt quite emotional when the lock is finally out of the way of me getting into my after-three-days change of clothes, I am always grateful for Yuko-san the HM for this moment, and will try my best to not be the same stupid Nana who lost her suitcase keys. As we were walking to return the tools, she told me, “Doing this makes us look like a pair of thieves don’t you think?”. It is a night that I think I cannot forget. I am very grateful that I was encountered by the chance for interview and move to HdB, not only because the lobby is nice and the garden is beautiful and that there are two pianos we can play with, but also because of how kind and lovely the people are and the environment being created, that I can already feel a sense of belonging here. I am always grateful for the House Parents, Yuko-san and Takuya-san, friends, and others here for creating such a lovely place to call

home. Everyday in HdB, I feel moved by people’s ability to show kindness, and I am beyond grateful to be able to witness it.



## Volunteering in Thailand

Anthony Quispe (Peru)

Graduate School of Management, Kyoto University / 経営管理大学院京都大学

Since I arrived at HdB, I have experienced countless good experiences. The Common Meal events, Potluck events, and several parties around the year are events that give that feeling of uniqueness to HdB. However, probably the one with the most relevance last year (2024) was the volunteering I did in Thailand.



In the middle of the year 2024 I was chosen to volunteer in the city of Sukhotai in Thailand<sup>1</sup>. Thailand is a beautiful country with a unique cultural charm. Since my arrival, I was impressed by the efficient infrastructure, the green landscapes, and the hospitality of teacher Nonglak, who helped me settle in and introduced me to her

colleagues at Udomdarunee school. This volunteering consisted of teaching English and Japanese to middle school and high school students.



Honestly, I was not confident in my Japanese skills at first; however, as I volunteered, I gained confidence, while at the same time I was able to meet very kind local people and foreigners who shared their experience and journey in this country with me.

---

<sup>1</sup> タイへの日本語指導員派遣プログラム

This volunteer program was planned by Dr. Yokuo Murata, a council member of HdB

The campus was large and welcoming, with students and staff who made me feel part of their community. I was amazed by the customs, such as students wearing bare feet in the buildings. The cafeteria was affordable and varied, although I only got to try a portion of their dishes.



Overall, this volunteering experience was very enriching, as I shared about Peruvian culture and accompanied students on a field trip to Sukhothai Historical Park, while also learning about Thai customs, such as traditional greetings and the assignment of colors per day. In my free time, I explored the city with teachers and learned to cook Thai dishes.

As I said goodbye, the students gave me gifts, showing their generosity. With this writing, I would not only like to report on such an unforgettable volunteering experience, but I would also like to encourage HdB residents to participate in this program, as well as other similar ones. I firmly believe that an overseas experience contributes both personally and to the people around you.



So, what are you waiting for? 頑張りながら楽しもう!





## The Senselessness of War

Ayano Fukuda (Japan)

Kyoto Prefectural University of Medicine, Nursing

I currently have no immediate and pressing desire or longing to become a nurse. Becoming a nurse is one sure way for me to become financially independent and is feasible if I choose. This is due to the fact that I have many people supporting me as a “nursing student” and as a result of my moratorium and struggles as a “student.”

The most important thing I want to accomplish in life is to reduce everything related to deadly weapons: research, development, buying and selling, transportation, trade, etc.

As a high school student, I used to say that the solution to environmental problems lies in the economic behavior of people. However, neither individual behavior nor the economic system can be changed by simply trying to change it. In fact, it would certainly be considered more intelligent for many people to be aware of their purchasing behavior as some sort of declaration of intent and voting in everyday life situations. I now believe that, in order to change the flow of purchasing behavior and restrictions on the manufacture and sale of arms, we must likewise work on the economy.

And again, I am at a loss.

There are probably people in every country, and even in Japan, who die without being able to speak out because of the pain and embarrassment of experiencing war. PTSD in ex-military personnel is well known and publicly documented in the U.S. after the Vietnam War, which lasted from 1965 to 1975. Later, PTSD from the Battle of Okinawa and PTSD among ex-servicemen began to attract attention in Japan as well. Now I am also interested in the fact that the Japanese domestic media is extremely biased in its international coverage. In particular, there is a strong bias in which regions are covered. I think it can be said that we are generally “insensitive” to the actual impact in our daily lives and to the events that cause it.

In Japan and around the world, I would like to continue to research and think about the “senselessness of war” and appeal for anti-war measures this year. As a resident of Japan and a Japanese citizen, I would like to focus on the fact that the U.S. is a military-industrial complex and that there are people who are against military research at American universities, mainly after the Vietnam War. I would also like to watch what are generally called “anti-Japanese” films, which are produced and screened mainly in China and South Korea, to learn how they are perceived outside of Japan and the impact they have on people.

For me, war is meaningless. In my opinion, non-violence is a prerequisite, so when it comes to combat, I would rather cry and run away than be drafted and confronted. However, it seems that there are those who are willing and able to engaged in war. Japan is one such country, although not as large as the U.S., that can be said to have a military-industrial complex.

As one who does not want war, my suggestions to those who do are as follows

- Weapons should be left simply as cultural and decorative objects. (Or could they be put to some peaceful use?)
- I would like the training of the military in each region to focus on defense rather than offense.
- I want future battles to be fought without loss of life (with as few injuries as possible).

Will I continue to be a nurse and speak out against war? Will I change my major to international relations? To what extent will I be involved in academic fields in the future? I am undecided in many ways, but I would be more than happy to pursue peace in the midst of peace.

My HdB colleagues have been my family to help me live in peace, as well as a clue to the path I need to go on. I can assure you that it is very rare to be given such a kind response in all possible encounters, at least while the battle is still in parallel. About this, I cannot appreciate it enough. Thank you so much to all residents and scholars so far. Thank you so much to the former House Parents: Natsuko-san and Keiichi-san. Thank you so much to the former Office receptionists: Mizuyauchi-san, Higuchi-san, and Okuda-san.

I especially appreciate the current House Mother Yuko-san. I want to thank House Father Takuya-san and their children and Oscar-kun as well.



## My sister visits HdB

Damian Ratto (Argentina)

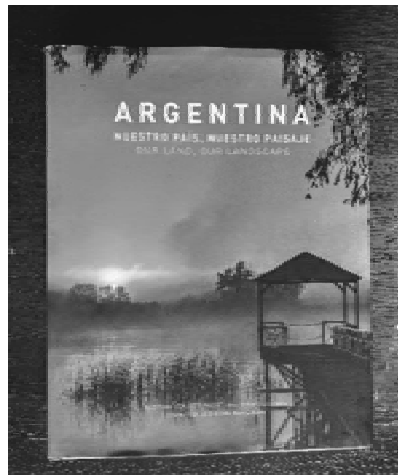
Graduate School of Management, Kyoto University

In August 2024, my dear sister Daniela visited Japan looking for the best vacation of her life and to see how I was living. Everything was beyond her expectations, as she received the warmest welcome from our beautiful house and even enjoyed one of our common meals, where we cooked some tiramisù! :D

After experiencing most of what Kyoto has to offer, it was time for us to depart looking for more adventures around Japan until the time to split again arrived.



I will always be grateful to this house for receiving my sister and to my friends for showing her around and joining us on our trips. Once again, thank you HdB!



## In Love with TOTO-san ♡

Gayatri Gawande (India)

Graduate School of Energy Economics, Kyoto University



When I first arrived in Japan, I thought I would fall in love with its rich culture, delicious cuisine, and scenery, but it was TOTO-san who stole my heart. It might sound weird, but anyone who has experienced the magic of TOTO-san will surely understand my feelings.

My first encounter with TOTO-san was after a long flight from India, at Kansai Airport. TOTO-san greeted me by automatically lifting its lid as I approached, as if saying, “いらっしやいませ”. It was just like how a true gentleman opens the door for a lady.

Of course, as with any relationship, there were a few awkward moments in the beginning. TOTO-san had so many buttons and symbols all in Japanese, which initially intimidated and intrigued me. One had icon of bidet and water spray, one had musical note, and one even had waves (I still don't know the use of it). On my first try, I accidentally pressed the wrong button and activated the wrong bidet function. It was a moment of shock and laughter, but TOTO-san quickly redeemed itself. I then translated the options using my phone and got the hang of things. Sitting down, I was pleasantly surprised to find the seat warm which made me feel very comfortable and at ease. I could customize the angle and pressure to suit my preference. When I stood up, it flushed automatically and closed its lid with quiet precision. I didn't have to touch anything, which felt incredibly hygienic. TOTO-san was very caring and detail oriented throughout and the experience felt very luxurious.

TOTO-san is no ordinary, it is sleek and handsome, and the best invention by Japanese people so far. It taught me that even the most routine aspects of life can be transformed into moments of joy. I love daydreaming while spending time with TOTO-san. I wish to have my own house in the future and TOTO-san will surely have a special space in my house ^\_^

## Six Months at HdB: My Experience

Guo Kunhao (China)

Graduate School of Agriculture, Kyoto University

I have been living in Kyoto International Student House (HdB) for six months now, and it has been an unforgettable experience. When I first moved in, I was both excited and a little nervous about sharing a living space with people from different cultural backgrounds. However, I quickly realized that HdB is more than just a place to stay—it is a community where people support and learn from each other. From the very beginning, the warmth and kindness of the residents and the House Mother made me feel welcome. Despite our different nationalities and languages, we bonded over shared meals, late-night study sessions, and everyday conversations. Living in HdB has given me a deeper understanding of different cultures and helped me improve my communication skills, especially in Japanese and English. One of the most memorable aspects of my time here has been the common meals and gatherings. Whether it was a simple potluck, a cultural exchange day, or a karaoke night, every activity strengthened our friendships. I especially enjoyed the times when we cooked together, sharing traditional dishes from our home countries. It was fascinating to see how food brings people together, no matter where they are from. Of course, life at HdB also had its challenges. Balancing academic responsibilities at Kyoto University with social activities was sometimes difficult. There were moments when I had to spend late nights working on my research while there were the funny events at house lobby. But in the end, these experiences helped me develop better time management skills and self-discipline. Now, as my time at HdB is continuing, I find myself feeling both grateful and nostalgic. The friendships I have made here will stay with me for a lifetime. I hope that one day, when I return to Kyoto, I can visit HdB again and see how it has changed, just as I have changed through my experiences here. To future residents of HdB, I would say this: embrace the experience, step out of your comfort zone, and cherish every moment. Living in an international community is a rare opportunity that will broaden your horizons and shape your worldview in ways you never expected.

To everyone at HdB—thank you for making my first six months in Japan so special.

## “THE APPRENTICE” 視聴後レビュー

深沢健人(Kento Fukasawa) (日本)  
同志社大学法学部

昨年のYearBookでは映画『ロッキー』について書いた。せっかくなので今年も映画について書く。今年はタイトルにある通り、「THE APPRENTICE」。

この映画は邦題で「ドナルド・トランプの創り方」とサブタイトルが添えられているように、2025年にカムバックを果たした(史上2人目の「連続でない2期を務める」大統領。第22・24期クリーブランド大統領以来128年ぶり。)ドナルド・J・トランプの若かりし頃を中心に描く作品だ。トランプには、ロイ・コーンという師匠がおり、彼との出会いが、少し気弱なトランプ青年を今のような存在へ変貌させていく—これがストーリーの主な柱である。詳しい内容は、映画そのものを見ていただきたいほか、映画についての情報、製作陣の様子・コメントについては公式パンフレットを参照されたい。

肝心のレビューについてであるが、少なくとも僕は良くできた映画だと感じた。というのも、製作陣のコメントにもあるように、人物そのもののみならずアメリカの政界組織も炙り出したいという取り組みは成功しているように思われるからだ。(つまり、レビューサイトや映画雑誌に散見される「この映画はトランプをどう描きたいのかわからない」という系の批判はやや的外れだと感じる。)作中ではトランプが政界入りする前の段階で終わってしまうのであるが、トランプ大統領誕生につながる系譜への示唆は各所に散りばめられていて注目して見ると面白い。

例えば大統領の就任演説がテレビで中継されるシーンが度々登場するが、取り上げたいのはその扱い方である。ニクソン・レーガンのものは比較的是っきりと時間を与えられて登場する一方、フォードは小さく一瞬、カーターに至ってはそもそもシーンがない。この扱い方の差は、明らかに意図的であることが指摘できよう。MAGAの流用の様にトランプがレーガンをなぞった政治運動を展開していることは、広く知られた事実である。またニクソンは大統領の品位を大きく失墜させ、大統領に「悪」のイメージを付与させた。(ここには出ないが、クリントンもスキャンダルを抱える大統領に対する国民の受容度を高め、トランプの登場に一役買っている。)トランプ登場への道を開いた2人に対して、清廉潔白で宗教に敬虔なカーターは映画には一切登場しない。「トランプの創り方」には必要ない要素だということだろうか。非常に示唆的である。他にも本作には政・経に関した様々な要素が隠されているのでぜひ意識してご覧いただきたい。

視聴後改めて、トランプは「原因」ではなく「症状」なのだと感じた。つまり、「破壊者トランプ」は実行役であるとの理解が適切であるように思える。アメリカそのものの変容がトランプを生み出している—このような指摘は、政治学のフィールドでは繰り返しなされている。実際のところはどうかかわからないが、草の根の交流が国際関係を支えると僕は考える。HdBはその育成にぴったりの場所じゃないか。残り少ないここでの日々を大切にしようと思ったことを結びとする。

## **The Hobby I Never Thought I Would Use**

Kota Nomura (Japan)

Faculty of Economics, Kyoto University

I began DJing in middle school, after being inspired by a friend who was very skilled at it. He often showed me how to DJ using an app called djay on his iPad, which I still use today (and it's free!). At that time, my music taste was mostly EDM. And artists like Martin Garrix and Avicii were my biggest influences. I became absorbed in DJing myself, initially using just my phone.

There are many types of DJs, each with their own skills, but my passion lies in transitions and mashups. Transitions are what DJs in clubs do, smoothly connecting two songs to maintain the crowd's energy. On the other hand, mashups involve mixing one instrumental song with one vocal track, creating a completely new vibe. I always feel a great sense of satisfaction when I discover a good mashup.

I have continued DJing as a hobby throughout high school and university. However, I never imagined I would get the chance to perform in front of people, until we planned a dance party in the dorm.

I don't remember the exact month, but around March or April, some residents including myself, began organizing a dance party as a new event. We worked hard to plan everything, and many residents helped out on the day as staff. In May, the event was held and I performed for four hours until the party ended. It was incredibly fun to see people dancing and enjoying the music I played. I felt satisfied when I successfully performed smooth transitions between songs. It was an amazing experience, and I am very grateful to the residents and House Parents for making it happen.

Another dance party took place in November, but this time, I focused on teaching others how to DJ. Since I would be leaving the dorm at the end of the semester, I wanted to pass on my knowledge and prepare new DJs for the next event. I look forward to returning to see others DJing and dancing.

## HdB means House of Encounters:

Once-of-a-lifetime encounters come and go in waves but all will be loved and missed

Nguyen Bich Ngoc (Jade ) (Vietnam)

Research Student, Global Environment Program, Graduate University for Advanced Studies (SOKENDAI)

那片笑声让我想起我的那些花儿  
That laughter reminds me of those flowers of mine  
在我生命每个角落静静为我开着  
They quietly bloomed in every corner of my life  
我曾以为我会永远守在她身旁  
I thought I would be by their sides forever  
今天我们已经离去在人海茫茫  
And then today we have ventured out into the vast sea of people  
如今这里荒草丛生没有了鲜花  
Now this place has been overgrown with weeds and without any flowers  
好在曾经拥有你们的春秋和冬夏  
好在曾经拥有你们的春秋和冬夏  
Still, it's fortunate that we once had each other through the seasons, from spring to winter  
她们都老了吧，她们在哪里呀  
They have all grown old now. Where are they now  
幸运的是我曾陪她们开放  
Still, it's fortunate that I was once able to accompany them to bloom  
去呀 Go  
她们已经被风吹走 散落在天涯  
They have already gone with the wind to scatter to all corners of the world.  
她们都老了吧，她们在哪里呀  
They have all grown old now. Where are they no  
我们就这样 各自奔天涯  
Just like that, we have all separately set off to different corners of the world.<sup>1</sup>

HdB, Kyoto, Japan, December 2024.

I chose HdB as my first accommodation when I came to Japan mostly because of the practicality of it. This dorm is 10-15mins walk to Kyoto University where I had to study Japanese for 6 months. Initially, I planned to stay here only until I finished the course as the place I had to go to for the next chapter of my academic journey was so far away. 6 months have passed since then, and little did I know, I think I have grown a bit too attached to this beautifully messy place.

**HdB is a “family” with a bunch of “young adults” navigating ourselves through our own life journey.**

*There were days when we just allowed ourselves to be stupid together and lived for the moment,* which usually just involved a lot of drinking and eating, and talking nonsense about different things, which usually was relationship-related..

“Well because it’s fun to just do so, don’t you think? Imagine one day when I have grandkids and they ask me “Grandpa, what did you when you were living in Japan?”. I want to tell them the most amazing story ever. I will sit them down and say “Kids, you know what, it’s a hell of a drive,

---

<sup>1</sup> If you are interested, please search for that song I cited here called “那些花儿” (Na xie hua er-Those Flowers) by 朴树 (Pushu), it’s a really nice song.



after a crazy party where we made so much money while having fun and another after-party drinking the remaining alcohol we were selling after that, I went for a hike at 2 am together with my good friends at the dorm, being all drunkards at the time”.

*And there were also days when we talked a lot about our hazy futures together. We looked into our different futures together, but also separately.*

“I want to fall in love so badly. I want to find my true love.”

“Why do you want to have a family and kids?” – “Because I want to someday teach my kids how to play soccer and play soccer with them.”

“I want to go travel the world, get to see new places and meet new people.”

“I want to be a researcher because I find this thing so fascinating and there is still so much that we humans still don’t know about the universe out there.”

“I don’t exactly know what I want to do in the future but I know I want to get a good job.”

“I don’t know”..

[Future] is where nothing is set in stone. Here at the present, you are always allowed to dream. And I find my dormmates’ dreams so beautiful in their own ways.

---

***HdB is where encounters happen- those 一期一会 once-of-a-lifetime encounters that come and go in waves, but all will be loved and missed***

In HdB, you will eventually learn about the “come and go” in life, saying goodbyes and welcoming new beginnings on repeat. Or it is just only me who finds those moments very bittersweet every time.

I still remember very clearly the day I had to send off a very dear friend of mine here.

When I first met her, her time here in HdB, Kyoto, Japan was already timed by the months. She told me at that time she didn’t try to foster deep connections with people around her anymore, as eventually, they would all leave after a few months, and she would leave too. We both didn’t know back then we would naturally bond so much. I especially felt indebted to her for teaching me how to play the first parts of Epiphany on the piano (which I still sometimes do to this day while I’m living here in HdB). And then, what must come eventually came- the day when she left as her exchange period here had ended. I escorted her to the train station departing for Tokyo, along with a few friends. Before she left to go inside, we hugged and wished each other the best. The moment we released each other from our arms, she turned around and headed into the train station without even looking back just once. (I remember cursing her in my head at that time for that..). I guess because she didn’t want to cry nor did she want me to cry, for we all wouldn’t have been able to help it.

“*Better by far you should forget and smile than that you should remember and be sad.*” – a quote by Christina Rossetti that she wrote to me. However, I would like to argue otherwise, that you should remember and be sad, because this type of sadness is worthy. It’s proof that you have

loved the people whom you have spent time with.

At the moment I'm writing this, I already know that almost half of the current residents- my friends, will move out the next semester. Every time I think about it, I don't know how I will deal with it.

At the moment I'm writing this, HdB is preparing to welcome in so many new residents again to the point that all rooms might be fully occupied again. And I also don't know how I will deal with it.

But I guess I will just have to deal with it.

Instead of running away, allow yourself to feel even though it can be a bit overwhelming from time to time. To some, it is that rather than nothing at all.

In the past 10 months since coming to Japan, I think I have finally allowed myself to become "more human".

And one day, I will fly away again too. Until that day comes, I would still like to cherish all who have been around as they have become a part of me.

*"Whenever and wherever you want to fly, please fly. I will be happy and be there for you always"*- Yuuko-san, our beloved House Mother who came to HdB at the same time with me, told me while I was crying beside her at Kamogawa one day.

We will eventually set off to different corners of the world and start a new chapter of our lives individually. We still might be able to meet yet again.

*Someday, somewhere. またねー*

*Wherever we are, we will still be connected if we want to. 森羅万象 All in nature*

And I hope everyone will look back at what we have shared here, fondly.

./.



**"5cm per second is the speed by which a cherry blossom gets separated from its tree"**. Fleeting slowly but surely with a sense of bittersweetness.

I first came to Japan in April 2024 where the Sakura was just in full bloom, later than forecasted. Despite it being a sight of alarming climate change, a part of me couldn't help but romanticizing that they were actually waiting to welcome me to this Land of the Rising Sun.

## Starting to Be a House Mama's Boy at 22

### 22歳から始めるマザコン

Ryosuke Meki (Japan)

Faculty of Engineering, Kyoto University

I became mama's boy at 22. My first impression of her was that she seemed elegant and well-bred. But she is more than just that. First, her ability to take action is remarkable. She interviewed in April all residents to know them better and she built close relationships with neighborhood, making HdB a part of the community, similar to our role in the summer festival. Additionally, she knows how to balance stepping in herself and allowing the residents to take initiative. Second, her kindness is admirable. She walks around each floor, cleans the kitchen every night, takes residents who get sick to hospitals and cooks meals for them. In the interview in April, I spoke with her about kindness towards others and her perspective was really wonderful and left a lasting impression on me. There are more things that showcase her kindness.

Moreover, I realized how strong she is as a person when I became a board member. She worked hard behind the scenes, even when we didn't see it. Takuya-san as well as her also works hard for HdB when we don't notice. She must be really tired and stressed than we can imagine. Even so, she always smiles and is full of energy in front of us and never misses her nightly rounds. I really respect her. I want to become as kind and strong as she is. Thanks to her, we've been able to enjoy a comfortable life in HdB. I want to make sure I never forget to be grateful to her.

Thank you so much, Yuko-san and Takuya-san

Lastly, I want to write my gratitude towards HdB and residents because it is the last time for me to write the Year Book. Over the past two years at HdB, I have had a very fulfilling experience, thanks to all of you. You are really kind and I learned a lot from you. Through my life at HdB, the world has felt much closer, and I've learned that prejudices towards different countries, religions, and races are wrong. It's important to approach each person as an individual. I'm really happy to live here.

Thank you, everyone.

## Influenced by HdB

Shun Aimoto (Japan)

Faculty of Sports and Health Sciences, Doshisha University

I'm the one who got interested in DJing from Kota. Actually, when I studied abroad in Germany, one of my friends played DJ for like 10 years. The more I listened to his DJ, I got an interest in DJ. Then I met Kota in HdB. I learned how to. The more I learn DJ, I got fascinated by it. But playing DJ is not the only one thing I got fascinated from HdB. HdB made me a fan of billiard and alcohol. Honestly, I was already a big fan of alcohol hahaha.

But the thing is like here, in HdB, I can meet a lot of types of alcohol which I have never seen in my life. For example, the drink that I got from Damian was crazy. It includes more than 90% alcohol. And it doesn't taste so bad. The reason why I got fascinated with them is that it doesn't go on one way. When I do those stuffs, always, yes, always happens unexpected things like my life. They are not only fun, but also, I can learn a lot of stuff from them. For instance, when I drink alcohol with my residents or friends from outside of HdB, they show me other aspect of usual. It makes them more fashionable people. Also, they make me feel like I'm the strongest person with drinking hahaha. Anyway, I'm one of the big fans of HdB and you guys ;). I love HdB, and you guys. Tonight is the night, right?



## HdB での新しい生活

森 寿々花 (Suzuka Mori) (日本)

京都大学大学院農学研究科

私は、同じ研究室の友人の勧めで HdB について知りました。それ以前はオランダで交換留学をしており、その際に身に着けた英語の習慣と国際交流を日本に帰国してからも続けられると思い、入寮を決めました。

入寮して約 3 か月がたちましたが、入寮してよかったと心から感じています。HdB ではさまざまなイベントが開催されており、レジデントとの交流はもちろん、その友人たちともつながることができるなど、多くの出会いがありました。もちろん、共同生活ならではの悩みや葛藤もありましたが、それらもすべて私の人生に必要な学びだったと感じています。特に印象に残っているのは Open House Party です。私はイベント係として初めての大規模なイベントを担当し、どのように進行し、準備すればよいのか戸惑うこともありました。しかし、みんなで話し合い、協力し、当日参加者が笑顔で過ごしている様子を見て、とてもうれしく思いました。このような成長の機会を得られたことを、本当に良かったと感じています。

私はまだ卒業まで 1 年ありますので、これからも HdB でさまざまなことに挑戦できることをとても楽しみにしています。こうした貴重な機会を与えてくださる関係者の皆様、地域の皆様、常に家族のように支えてくださるハウスペアレントやレジデントのみんなに心から感謝しています。



## No Dance Party No Life

Toshihito Shiota (Japan)

Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University

Through the 2 semesters in my HdB's life, I experienced dance parties twice (once per semester). As for both parties, I planned it as a member of "Dance Party toban".

About the party in Spring semester, no one knew how the party was like because it had been since while since the party was held last time which was during COVID-19. Thus, I remember it was the hardest part to have shared image of party among members. A couple of weeks before the party, we at lobby discussed it almost every night. What interesting was that each member had their ideal party style in mind. For example, when someone suggested selling specific type of food or drink, others responded to it, saying "No! in Germany we don't eat it because...", or "Hmm, from perspective Latino, it's weird to drink it during dance...". They would have killed me if I have suggested selling sake. Anyway, we somehow made shared concrete image of party and planned to manage the event.

At the party, we succeeded in collecting more than 100 ppl and making enough profit. Personally, it was so much fun being in charge of bar, making drinks, chatting guests, and being drunk.

About the Fall party, we tried to improve some points found in the spring party, although we didn't change the method and image greatly from a previous party. This time as well, a lot of guests came and made us rich. What is better, some of guests joined the last party and came back here again, which means HdB came to become international common space around this district in the name of "Haus der Begegnung".

There are two things I learned through dance parties. First, the importance of involving others. Needless to say, we couldn't have those parties without having residents, House family, and OBs corporation. They helped a lot even if they are not big fans of party things. I am really grateful for their contribution. Second, HdB is a perfect place to challenge anything. Such as dance parties, many residents have tried to have unique events that come from their interests and curiousness, and I want all residents to try it since what makes HdB HdB is residents, although HdB changes with the times.

## 【資料】

### 公益財団法人京都国際学生の家 役員等

#### 監事 (2024年度)

浅田 拓史 (大阪経済大学教授、公認会計士)  
折田 泰宏 (弁護士)  
秋津 元輝 (京都大学教授、OM 会員)

#### 評議員会 (2024年度)

深海 八郎 (眺八海倶楽部総支配人)  
村田 翼夫 (筑波大学名誉教授、OM 会員)  
吉田 和男 (京都大学名誉教授)  
平野 克己 (日本塗装機械工業会専務理事) (~2024.10)  
山本 慶一 (元 HF、元ユニチカ株式会社中央研究所) (2025.1~)  
山田 祐仁 (辻調理師専門学校、学寮運営委員長、OM 会員)

HF	:House Father
HM	:House Mother
HC	:House Committee
OM	:Old Member

#### 理事会 (2024年度)

##### 理事長

内海 博司 (京都大学名誉教授、元 HF、OM 会員)

##### 常務理事

吉川 晃史 (関西学院大学教授、公認会計士) (~2024.8→理事)  
吉村 一良 (京都大学名誉教授、元 HF、OM 会員) (理事→2024.9~)  
永井 千秋 (公財) 新産業創造研究機構 元事務局長、  
OM 会員) (理事→2024.9~)

##### 理事

中久木 卓也 (HF、京都桂病院脳卒中センター長 兼 脳神経外科 部長)  
上村 多恵子 (京南倉庫(株)代表取締役社長)  
嘉田 良平 (総合地球環境学研究所 名誉教授、OM 会員)  
RUSTERHOLZ Andreas (関西学院大学文学部教授)

#### 顧問 (2024年度)

所 久雄 (社会福祉法人京都国際社会福祉協力会理事長)  
平松 幸三 (京都大学名誉教授、OM 会員)  
森 棟公夫 (椋山女学園特別顧問、京都大学名誉教授)

岩 崎 隆 二 (和晃技研(株)代表取締役社長、OM 会員)  
中 島 理一郎 (元同志社大学教授、OM 会員)  
西 尾 英之助 (京都日独協会会長)  
蔦 田 正 人 (弁理士法人蔦田特許事務所代表、OM 会員)  
諏 訪 共 香 (元立命館大学講師)

## 学寮運営委員会 (HC) (2024 年度)

### 運営委員長

山 田 祐 仁 (辻調理師専門学校、OM 会員)

### 運営委員

坂 口 貴 司 (三菱電機(株)、OM 会員)  
鈴 木 あるの (京都橘大学教授)  
TANANGONAN Jean (近畿大学講師、OM 会員)  
DAVIS Peter (Telecognix Corporation CEO)  
松 橋 眞 生 (京都大学准教授、元 HF)  
長谷川 真 人 (京都大学教授)  
北 島 薫 (京都大学教授、元 HM)  
笹 山 忠 則 (大阪府立大学名誉教授、元福岡県行橋市教育長)  
Naresh Bedi (元 HF、OM 会員)  
Joseph A. Phillips (元 HF)  
長谷川 晶 (学校法人京都情報学園理事、京都情報大学院大学教授)  
中久木 卓 也 (House Father)  
中久木 裕 子 (House Mother)

CHAIRPERSON of TEAM

VICE CHAIRPERSON of TEAM

## 職 員 (2024 年度)

奥 田 彩 耀  
吉 竹 慶 一  
樋 口 洋 子 (~2024.8)  
福 智 雅 代 (2024.12~)



## 2024年度 補助金・寄付金・その他ご支援

2024年1月1日～2024年12月31日受領分

敬称略

寄付金 計 2,381,000円

寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者	寄 付 者
和晃技研(株) 岩崎 隆二	(株)三悦 代表取締役 樋田浩三	サン子ども園福泉園 吉川昭一	ボーイスカウト京都 第42団 谷口 平八朗
有限会社ハイナン 土屋俊宏	国際ソロプチミスト 京都たちばな		

HEINRICH REINFRIED	Marina Reavis	ケウヘイッシュェウイリ・ ルースダン	ジーン・タナンゴナン
ベンジャブール・アナス	安藤 健太	井上 勝六	稲葉 カヨ
永井 千秋	王 然	岡田 徳子	岡本 修身
岡本 徳子	加藤安珠	岩沼 享子	岩田 忠久
岩田 忠雄	岩田 典子	岩崎 隆二	吉村 一良
仇 宏暄	琴浦 良彦	金 盛彦	窪田 弘
香月 桂子	高木 由臣	今西 二郎	佐藤 文彦
細川 治	坂野 泰治	山下 進一	山本 雅英
山本 慶一	山本 峰丸	四方 八州男	市川 由紀
児玉 靖司	寺本 美智子	手塚 修司	秋津 元輝
十河 智江子	松成 亮太	松田 敬一	森 和代
森棟 公夫	深海 八郎	西本 太観	石原 ゆき子
千葉 絢子	川野 家稔	船津 雅夫	前上 英二
前川 晃一	倉田 麻里	村松 拓	村田 翼夫
多田 譲治	大菅 克知	大槻 憲弘	大畑 京子
谷 幸治	竹田 洋子	仲谷 正博	長谷 博友
田森 行男	田中 徳壽	渡邊 恵子	土居 貞往
湯 夢佳	奈倉 道隆	内海 博司	内藤 義弘
富永 芳徳	福本 和久	片山 一道	木下 研一
木原 文太左右衛門	木村 久美子	木葉 丈司	野田 和伸
藪下 義文	藪田 定男	鈴木 松郎	鈴木 緑
和田 浩一	澤田 正樹	眞木 恵子	齊藤 眞弘
高田 徳子	鎌野 幸子	眞木 喜浩	

寄贈品・その他 アルコール類、食品類のご寄附をいただきました。

置田 和永	たけのこ(1箱)、柿(1箱)	矢田 裕子	大皿
後藤 隆騎	切手、コインその他	笹山 忠則	ワイン (2本)

皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

\* 2025年1月以降のご寄付分は、次年度の報告書に記載させていただきます。

公益財団法人京都国際学生の家 の 略 史

西暦 和暦	ハウスペアレンツ		事項
	日本	スイス	
1961 S36			<ul style="list-style-type: none"> <li>・1月21日--スイス東アジアミッション(SOAM)コーラー牧師構想の「出会いの家」を京都に実現するための募金活動開始(於チューリッヒ)</li> </ul>
1962 S37			<ul style="list-style-type: none"> <li>・11月19日--第1回京都「国際学生の家」建設発起人会</li> <li>・3月24日--第1回京都「国際学生の家」建設実行委員会</li> </ul>
1963 S38			<ul style="list-style-type: none"> <li>・6月--SOAMとHEKSより67万スイスフラン(邦貨約5,560万円)の寄付</li> <li>・12月16日--財団法人京都「国際学生の家」設立</li> <li>・12月16日--理事長湯浅八郎博士就任</li> <li>・12月16日--財団法人京都「国際学生の家」寄付行為制定</li> </ul>
1964 S39			<ul style="list-style-type: none"> <li>・8月10日--学寮建設工事契約; 欄竹中工務店、総額約8,700万円</li> <li>・8月中旬--地鎮祭</li> <li>・10月14日--寄付金(一般)の免除対象となる試験研究法人等として承認(4教文第388号・京都府教育委員会委員長)</li> <li>・12月25日--財団法人京都「国際学生の家」規約制定</li> </ul>
1965 S40	4月: 稲垣 Inagaki	4月: ドマムート Dumermuth 9月: コーラー Kohler	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月31日--竣工</li> <li>・4月1日--開寮</li> <li>・4月10日--献堂式</li> <li>・10月頃--ハウス・チーム誕生</li> </ul>
1966 S41			<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月10日--学寮開寮一周年記念式典</li> <li>・12月20日--寄付金(一般)の免除対象となる試験研究法人等として承認(雑文第1の28号・文部大臣)</li> </ul>
1967 S42	3月: 中山 Nakayama		
1968 S43			
1969 S44	4月: 内田 Uchida	5月: ペニンガー Pfenninger	<ul style="list-style-type: none"> <li>・12月16日--西館完成</li> </ul>
1970 S45	7月: 不在		
1971 S46	4月: 大沢 Ohsawa	4月: バア Bär	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2月18日--年報第1号発行</li> </ul>
1972 S47		3月: ケッター Kötter	
1973 S48	6月: 内海		<ul style="list-style-type: none"> <li>・財団法人万博協会より資金を受け、屋上改修工事</li> </ul>

	Utsumi		
1974 S49	50	4月: 内田 Uchida 12月: ハットナム Putnum	<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月1日--財団法人京都「国際学生の家」諸規則の改正</li> <li>・5月18日--十周年記念式典</li> <li>・5月1日--年報『出会い』第2号「十周年記念号」発行</li> </ul>
1975 S50	7月: 山本 M. Yamamoto		
1976 S51			
1977 S52			<ul style="list-style-type: none"> <li>・6月24日--「ライオンズ基金要綱」を制定</li> <li>寄付金総額1,340万円を基本財産に組み入れ</li> <li>昭和50年度・51年度のライオンズクラブ(京都27クラブ)よりの寄付</li> </ul>
1978 S53			
1979 S54			
1980 S55	3月: 琴浦 Kotoura		
1981 S56			<ul style="list-style-type: none"> <li>・8月15日--初代理事長・湯浅八郎博士逝去</li> </ul>
1982 S57	2月: ブルコルター Burkolter		
1983 S58	9月: 古川 Furukawa		<ul style="list-style-type: none"> <li>・1月31日--第2代理事長に上野直蔵博士就任</li> </ul>
1984 S59			<ul style="list-style-type: none"> <li>・8月21日--創始者・ウェールナー・コーラー博士逝去</li> <li>・10月2日--第2代理事長・上野直蔵博士逝去</li> <li>・10月26日--第3代理事長に遠藤彰氏就任</li> </ul>
1985 S60			<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月8日--年報第8-9号「二十周年記念号」発行</li> <li>この年にHdBのエンブレムの制定</li> <li>・10月1日--国際交流基金の第1回国際交流奨励賞地域交流振興賞受賞</li> <li>・10月19日--創立二十周年記念式典</li> </ul>
1986 S61			
1987 S62	4月: 内海 Utsumi	3月: 不在	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同窓名簿(1987年度版)1987年4月作成</li> </ul>

1988 S63		4月: フォレンバウター Vollenweider	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1月18日--財団法人京都「国際学生の家」諸規則の整備</li> <li>・5月28日--財団法人京都「国際学生の家」パンフレット作成</li> <li>・10月15日--京都市より表彰</li> </ul>
1989 S64 H1			<ul style="list-style-type: none"> <li>・7月2日--第1回国際食べ物祭り開催 この年にHdBの旗を制定</li> </ul>
1990 H2	8月: 山本 Yamamoto	4月: オッテ Otte	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月31日--第3代理事長・遠藤彰氏辞任(広島女学院大学学長就任)</li> <li>・4月1日--第4代理事長に稲垣博博士就任</li> </ul>
1991 H3			
1992 H4			
1993 H5	4月: 吉村 Yoshimura		
1994 H6		3月: ヴァイダー Wider	
1995 H7			<ul style="list-style-type: none"> <li>・7月8日--創立三十周年記念式典(SOAM会長他5名来日、出席)</li> </ul>
1996 H8	4月: 戸口田 Toguchida		<ul style="list-style-type: none"> <li>・同窓名簿(1995年度版)1996年5月作成</li> </ul>
1997 H9			
1998 H10			
1999 H11	4月: 高橋 Takahashi		12月31日--SOAMとの法的関係解消、ハウスファーザー二人制廃止
2000 H12		1月: 以降、廃止	<ul style="list-style-type: none"> <li>・9月6日--財団寄付行為の改正</li> </ul>
2001 H13			<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月下旬--全職員の退職・全寮生の退寮</li> <li>・4月初旬--大改修工事開始</li> <li>・8月末日--工事完工</li> <li>・9月1日--再開館、新職員採用</li> </ul>

			・10月21日--再興祝賀行事開催
2002 H14	8月: 木戸 Kido		
2003 H15			
2004 H16			
2005 H17			・同窓名簿(2005年度版)1987年3月作成
2006 H18	4月: 前川 Maekawa	ハウスアドバイザー 10月: プアテン Buadaeng	
2007 H19		3月: 帰任	・1月20日--第4代理事長・稲垣博博士逝去 ・5月20日--第5代理事長に内海博司就任  ・11月17日--稲垣先生を偲ぶ会
2008 H20			・7月10日--第2代ハウスマザー・ネリー・コーラーさん逝去 (創始者・ウェルナー・コーラー夫人)
2009 H21	8月: 松橋 Matsuhashi		・7月17日--第3代ハウスマザー・ペニンガー好美さん逝去
2010 H22			・2月12日--石井米雄理事逝去 ・6月30日--田村武理事逝去 ・9月3日--西島安則評議員逝去 ・11月6日--創立四十五周年記念式典
2011 H23			
2012 H24	4月: 山本 Yamamoto		・3月31日--公益財団法人移行申請
2013 H25			・4月1日--公益財団法人認可  ・10月31日--第1次耐震審査実施(本館)
2014 H26	6月: 北島 Kitajima Phillips		
2015 H27			・3月30日--寄付金税額控除認可  ・11月7日--創立五十周年記念式典

2016 H28	3月: 飯田 Iida Hidding		<ul style="list-style-type: none"> <li>・5月31日--第2次耐震審査実施(本館)</li> </ul>
2017 H29			<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月--本館耐震・リフォーム案、西館立替案作成</li> <li>・9月27日--募金委員会発足</li> <li>・10月1日--募金趣意書作成、募金活動を開始</li> </ul>
2018 H30			<ul style="list-style-type: none"> <li>・8月～12月A-portにてクラウドファンディング</li> </ul>
2019 H31 R1	3月: 崔 Choi		<ul style="list-style-type: none"> <li>・2月26日--新募金趣意書作成(第一期工事に絞った)し、募金活動を続ける</li> <li>・6月8日--第1回同窓会(OM会)公開講演会、総会の開催</li> </ul>
2020 R2	4月: 村上 Naresh Murakami		<ul style="list-style-type: none"> <li>・4月からコロナウイルスのパンデミックが始まる</li> <li>・4月～6月--耐震工事及び排水管交換工事、運動場を第2駐車場に変更</li> <li>・7月29日--初代ハウスマザー稲垣和子さん逝去</li> <li>・12月12日--第2回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催</li> <li>・10～12月--ReadyForにてクラウドファンディング</li> </ul>
2021 R3	4月: ナレス Naresh		<ul style="list-style-type: none"> <li>・1月--神田啓治顧問逝去</li> <li>・2月3日--シュペネマン・クラウド顧問逝去</li> <li>・7月17日--第3回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催</li> <li>・11月～2022年1月--ReadyForにてクラウドファンディング</li> </ul>
2022 R4	4月: 山本 Yamamoto		<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月になるもコロナウイルスのパンデミックが続き留学生は入国できず。</li> <li>・6月25日--第4回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催</li> <li>・11月1日--大畑浩志元監事逝去</li> <li>・11月--ガス給湯器改修工事(本館・西館)</li> </ul>
2023 R5			<ul style="list-style-type: none"> <li>・3月--消火水槽改修工事</li> <li>・6月--地下トイレ廃止・1階に共有トイレ新設</li> <li>・6月17日--第5回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催</li> </ul>
2024 R6	4月: 中久木 Nakakuki		<ul style="list-style-type: none"> <li>・6月29日--第6回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催</li> <li>・10月9日--平野克己評議員逝去</li> </ul>

## 公益財団法人京都国際学生の家 利用者の集計

### ● 学生の部（レジデント）

国籍別利用者実数

1965年4月から2024年12月までの合計 83ヶ国 1,115名

アフガニスタン	6名	コロンビア	1名
アメリカ	48名	コンゴ	1名
アルゼンチン	4名	コートジボアール	1名
イギリス	14名	ザイール	1名
イスラエル	1名	シンガポール	19名
イタリア	6名	ジンバブエ	1名
イラク	3名	スイス	12名
イラン	13名	スウェーデン	3名
インド	23名	スーダン	1名
インドネシア	28名	スペイン	1名
ウガンダ	1名	スリランカ	11名
ウズベキスタン	2名	セネガル	1名
エジプト	8名	タイ	44名
エストニア	2名	台湾	27名
エチオピア	2名	タンザニア	4名
オーストラリア	2名	チェコスロバキア	4名
オーストリア	1名	中国	72名
オランダ	12名	朝鮮	4名
カザフスタン	1名	チリ	3名
ガーナ	1名	ドイツ	56名
カナダ	4名	ドミニカ	2名
韓国	52名	トルコ	12名
カンボジア	13名	ナイジェリア	3名
キプロス	1名	日本	366名
キルギス	1名	ニュージーランド	7名
グルジア	1名	ネパール	6名
ケニア	6名	ノルウェー	4名
パキスタン	6名	ホンジュラス	1名
ハンガリー	6名	マリ	1名
バングラディシュ	6名	マレーシア	23名
フィリピン	16名	マダガスカル	3名



フィンランド	1名	南アフリカ	1名
ブラジル	9名	ミャンマー	16名
フランス	9名	メキシコ	2名
ブータン	1名	モロッコ	4名
ベトナム	37名	モンゴル	10名
ベネズエラ	2名	ユーゴスラビア	4名
ペルー	5名	ラオス	1名
ポーランド	5名	リトアニア	1名
ボリビア	1名	ルーマニア	1名
ポルトガル	3名	レバノン	1名
香港	15名		

### ● 学者・研究者の部（スカラー）

国籍別利用者実数（同一人物の利用・同行家族を含まない）

1965年4月から2024年12月までの合計 96ヶ国 3,118名（内国籍記載なし17名）

アイルランド	1名	ウズベキスタン	1名
アフガニスタン	1名	ウルグアイ	1名
アメリカ	337名	エストニア	1名
アルジェリア	4名	エジプト	26名
アルゼンチン	1名	エチオピア	1名
アルメニア	1名	オーストラリア	39名
イギリス	111名	オーストリア	19名
イスラエル	11名	オランダ	35名
イタリア	46名	ガーナ	3名
イラク	3名	カザフスタン	1名
イラン	20名	カナダ	47名
インド	107名	カメルーン	1名
インドネシア	115名	韓国	206名
ウガンダ	2名	カンボジア	4名
ウクライナ	9名	旧ソビエト連邦	14名
キルギス	1名	ネパール	11名
ギリシャ	4名	ノルウェー	7名
ケニア	3名	パキスタン	14名
コスタリカ	2名	バーレーン	1名
コロンビア	1名	ハンガリー	10名
コンゴ	1名	バングラディシュ	16名

ザイール	1名	フィリピン	38名
サウジアラビア	1名	フィンランド	10名
ザンビア	1名	ブラジル	27名
シリア	1名	フランス	112名
シンガポール	25名	ブルガリア	4名
スイス	188名	ベトナム	35名
スウェーデン	17名	ペルー	6名
スーダン	3名	ベルギー	7名
スペイン	11名	ポーランド	33名
スリランカ	11名	ボリビア	1名
スロヴェニア	1名	ポルトガル	8名
セルビア	1名	香港	45名
タイ	188名	ホンジュラス	1名
台湾	98名	マダガスカル	1名
タンザニア	8名	マレーシア	40名
チェコスロバキア	12名	南アフリカ	2名
中国	179名	ミャンマー	10名
チュニジア	2名	メキシコ	8名
朝鮮（在日）	3名	モロッコ	6名
チリ	7名	モンゴル	1名
デンマーク	5名	ユーゴスラビア	13名
ドイツ	302名	ラオス	2名
ドミニカ	2名	ラトビア	3名
トルコ	22名	リトアニア	1名
ナイジェリア	4名	ルーマニア	3名
日本	331名	ルクセンブルグ	3名
ニュージーランド	10名	ロシア	24名

## 公益財団法人京都国際学生の家後援会会則

### (目的)

第1条 この規程は、公益財団法人京都国際学生の家（以下財団という。）の後援会員の入会及び退会並びに会費の納入に関し、必要な事項を定めるものとする。

### (会員)

第2条 財団の事業に賛同し、財団を支援する意を有するものは、後援会員となることができる。

2 会員になろうとする者は、所定の申込書を、代表理事あてに提出するものとする。

### (会費)

第3条 会員は理事会で定められた会費を、入会時に納入するものとする。

2 年会費は会員種別に応じて下記各号のとおりとする。

(1)	個人会員 (OM 会員)	年額	一口	5,000 円
(2)	法人・団体会員	年額	一口	30,000 円

\*OM= Old Member、元寮生

### (退会)

第4条 会員は、いつでも退会届を財団に提出することにより、退会することができる。

2 前項の場合、当該年度の会費が未納のときは、これを納入しなければならない。

3 既納の会費は、いかなる理由があってもこれを返還しない。

### (改正)

第5条 この規程の改正は、理事会の議決を経て行うものとする。

### 附則

- 1 この会則の施行に関し、必要な事項は別に定める。
- 2 この会則は、公益財団法人の設立登記の日（平成 25 年 4 月 1 日）から施行する。
- 3 この改正会則は、平成 26 年 3 月 10 日より施行する。（平成 26 年 3 月 8 日第 3 回理事会にて改訂）

## 公益財団法人京都国際学生の家同窓会会則

(名称) 第1条 本会は京都国際学生の家同窓会（略称 OM 会:Old Member 会）と称する。

(所在地) 第2条 本会の所在地は、京都市左京区聖護院東町10番地とする。

(目的) 第3条 本会は、京都国際学生を創設趣旨を尊重し、その発展と維持を期し、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事業) 第4条 本会は、次の事業を行う。  
1) 学寮の運営と発展とを支援する事業  
2) その他、本会の目的に沿う事業

(会員) 第5条 本会の会員は、次の者とする。  
1) 学寮の学生として在籍経験者、  
2) 学寮のハウスペアレント経験者、  
3) 学寮のスカラーとして滞在したことのある者で、学寮を支援する意志を有する者、  
4) 学寮の役員、職員を務めた経験者で、学寮を支援する意志を有する者、  
5) ハウスペアレントの家族であった者で、学寮を支援する意思を有する者。

(総会) 第6条 総会は会員で構成し、開催の30日前までに通知して会長がこれを招集する。

- 2 総会の成立は、日本国内在住構成員の20分の1の出席による。
- 3 前項の出席は、代理すべき構成員を明記した委任状の提出によって替えることもできる。
- 4 定期総会は、毎会計年度の終了後3カ月以内に開催するものとする。
- 5 臨時総会は、会長が開催を必要と認める時、これを招集する。
- 6 総会は次の事項を審議し、議決する。
  - 1) 会長、副会長、監事の選任にかかる事項。
  - 2) 会則の制定および改正にかかる事項。
  - 3) 予算および決算の承認にかかる事項。
  - 4) 活動計画および活動報告にかかる事項。
  - 5) 会員の退会ならびに除名の承認にかかる事項。
  - 6) 本会の解散にかかる事項。
  - 7) その他、会長が必要と認めた事項。

(総会の議決) 第7条 総会の議決は出席者の過半数の賛成による。

(役員) 第8条 本会に以下の役員を置く。役員に関するその他の事項は細則に定める。

- 1) 会長 1名
  - 2) 副会長 3名以内
  - 3) 幹事 若干名
  - 4) 庶務幹事 若干名
  - 5) 会計担当幹事 1名
  - 6) コーディネーター 20名以内
  - 7) 監事 2名
- 2 本条第1項3)ないし6)の幹事およびコーディネーターは会長がこれを任命する。

(役員の仕事) 第9条 役員の仕事は以下のとおりとする。

- 1) 会長は、この会を代表し会務を総理する。
- 2) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその仕事を代理する。
- 3) 幹事は、事業を円滑に推進するための必要な業務を分担し実施する。
- 4) 庶務幹事は、会員に関する名簿の管理その他本会の庶務に係る業務を担当する。
- 5) 会計担当幹事は、会計を執行管理する。
- 6) コーディネーターは、会員相互の連絡を密にする業務を担当する。
- 7) 監事は運営ならびに会計の監査を行う。

(役員会) 第10条 役員会は、会長が必要と認める時、これを招集する。

- 2 役員会の議決は出席者の過半数の賛成による。
- 3 前項の出席は代理すべき役員を明記した委任状の提出によって替えることもできる。
- 4 役員会は、電磁的通信手段によって開催することも可とする。

(会費) 第11条 本会の会員は細則に定める年会費を支払うものとする。会費は本会の維持運営にあて、臨時、特別の活動にかかる費用は別途参加費をもってこれにあてるものとする。

(会計年度) 第12条 本会の会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日とする。

(退会・除名) 第13条 第5条に定める会員のうち3ないし5に該当する会員は、

その意思を表明することにより、役員会の承認を得て、退会することができる。

2 本会の名誉を傷つける等、本会の会員としてふさわしくないと認められる者は、役員会が発議し、総会の議決を経て、除名することができる。

(解散) 第14条 本会は、総会の議を経て解散する。解散時に本会が所有する財産は、学寮に寄付するものとする。

(会則改正) 第15条 本会則の改正は、役員会の発議により、総会でそれを承認する。

(細則)

第1条 本会の役員を以下に定める。

会長：吉村一良

副会長：ジン・タナンゴナン

庶務幹事：前川佳世子

会計担当幹事：木葉丈司

幹事：柳そらや

コーディネーター：内海博司、平松幸三、梶茂樹、坂口貴司、秋津元輝、  
鶴塚健、前川佳世子、塩沢祥子、村松拓、ケヴヘイッシュウィリ・ルース  
ダン、河瀬光

監事：平松幸三、嘉田良平

第2条 会長・副会長・監事の任期は4年間を上限として定める。

幹事の任期は会長が定める。

第3条 年会費は¥0とする。

(付則)

本会則は、2019年10月18日より施行する。

## 施設概要

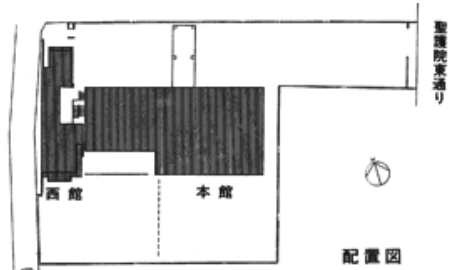
所在地	京都府京都市左京区聖護院東町 10
敷地面積	1,900.28 m <sup>2</sup>
建築面積	531.21 m <sup>2</sup>
延面積	1,778.78 m <sup>2</sup>



構造	本館	鉄筋コンクリート造	地下1階	地上4階
	西館	鉄筋コンクリート造	地上2階	

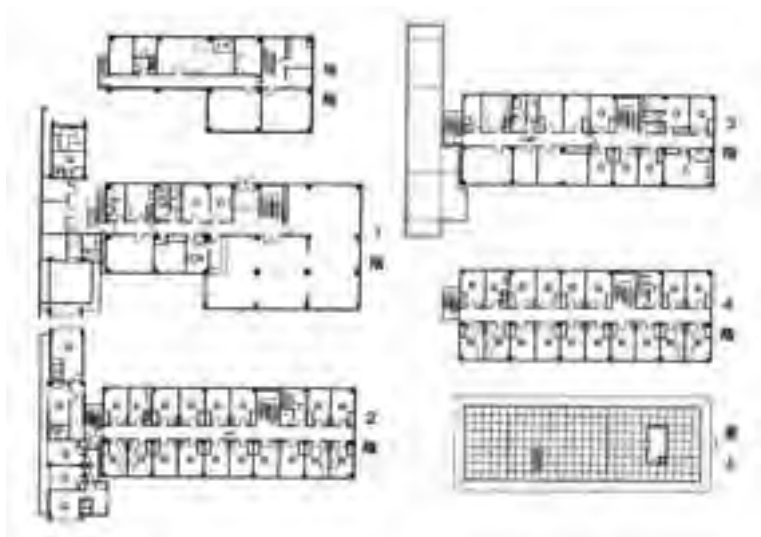
各階用途	本館 1階	事務室、会議室、ラウンジ、遊戯室、行専用キッチン、トイレ
	本館 2・4階	レジデント室 34室、キッチン2室、シャワールーム4室
	本館 3階	ハウスペアレントツ室、スカラー室 6室
	本館地下	洗濯室、倉庫、機械室
	西館	スカラー室 5室、ボーイスカウト会議室

学生居室 面積 13 m<sup>2</sup>  
洗面設備、ベッド、クローゼット、本棚、机、椅子、エアコン



その他設備  
日本庭園、卓球台、ビリヤード、ピアノ

R:レジデント室  
G:スカラー室



## 【編集後記】

### 定年後に思うこと

吉村 一良 (YOSHIMURA Kazuyoshi)

京都大学名誉教授、現・京都大学大学院工学研究科、同志社大学理工学部、1981OM 元 HF

光陰矢の如し(時に情けなし)、と言うが、前号で巻頭言を書いて、早一年が経ち、今回は編集後記を依頼され書いている。今回のYearbookの編集に携わり、内容も表紙もグローバルで非常に多様な時代に相応しいHdBのYearbookになったのではないかとと思う。皆さんの文章(や絵)に感心しきりである。

私こと、二年前に大学を定年になったが、ありがたいことにまだ非常勤で教育・研究活動が続けさせてもらっている。講義をしていまだに思うことがある。自分で説明しながら、「あっ、そうだったのか!」と気づくことがあるのである。自分でわかった気になっていたり、当たり前と思っていたことが、「違う!」、「実はわかっていない!」、「明らかではない!」と、学生たちに説明している自分の言葉でハタと気がついたり、そしてその意味がわかったりするのである。そう言うことは若い頃もよく有ったが、定年過ぎのこの年になっても起こるのは、本当に興味深く若い頃と同じ気持ちになる。

さてその際に、つくづく思うのは、ものごとや事象を理解するのは、gradualに徐々にではなく、急にハッと起ると言うことである。線形応答ではなく、non-linearな非線形応答であって、ステップ関数的なのである。これはスポーツが上達していく過程でも然りだと思う。私も経験があるが、スキーを始めた頃のこと、ボーゲンで何とか坂を滑り降りていたのが、ある時、ちょっとしたコツを掴み、急にパラレルターンが出来るようになる。するとそれが続けてできるようになり、ある時急にウェーデルンが身につくといった具合なのだ。勉強や学問でも一緒であって、わからなかったことが突然ハッと理解できたり、急に新発見のアイデアが閃く。この経験をするとその面白さ・感動が病みつきになる。もちろんわからない、できない、と悩んで、そのことをずっと考え続け、また練習し続けて初めて、その突然の進歩が起るのであるが。どんな小さなことであっても良いので、そんな思いを自分の弟子たちにも経験してもらいたいものだと思ってきた。今もそれは変わらない。そういったことを文系の友人に話したら、彼も大変興味を持っていて、メタ認知理論というものがそれに非常に関係しているらしい。分野横断の認識の一致であろうか。

人間関係や国際関係・交流などにおいてもこれは成り立つのであろうか。「ツノ突き合わせ」で議論していて、急にハタと相手のことや言っていることが理解できるということがあるのかもしれない。世界情勢でもそういうことが起こり、様々な人々が相互に理解し合えたら良いなあと思うばかりである。大きなことも小さな一歩から。我々はHdBからはじめていこうと思う今日この頃である。



## Reflection on Yearbook

Adhistry Larasati (Indonesia)

Graduate School of Agriculture, Kyoto University

For this Year Book I have received manuscripts from various people, such as the residents and the House Parents living in HdB. I have read the submissions and was filled with contentment for how wonderfully written they are.

They have shared their own stories; some wrote about their experience living in Japan, like how they have found their love with the TOTO toilet and their heartwarming experience here that was shared with a family member and friends. Others wrote their shared moments with friends while living in HdB and how it has shaped their lives, including their hobbies such as DJing and newly found hobbies like billiard and alcohol. While others also shared opinions regarding issues such as war and how we as humans are living our lives. There was also submission from the workshop toban regarding their workshop results and presentations at OM 会. Erika as one of the presenters shared something from her field in astronomy, which was about “spectroscopy”, a method used to observe celestial bodies. Then there was Jade who presented an interactive session with the participants that she called “Our ecosystem”, where she asks participants how different component of ecosystems mean to each of them. Lastly, Kota shared his hobby in the presentation, which was about “DJing”, where he demonstrated DJing technique in front of the audiences. In my perspective, these shared presentations are interesting, since they are not really something commonly introduced in our daily lives.

All in all, I think they are all wonderfully written submission that should be read by others, since they reflect interesting and meaningful stories. I really recommend the readers to read all those submissions here in this yearbook. Lastly, I will share a highlight gathered from the manuscripts that have caught my eyes: All of us gathered here in the Haus der Begegnung (HdB) as real human beings from various places, forming encounters, and will eventually fly off into different corners of the world again where each and every one of us will start a new chapter of our lives, but however apart we all are, we are still connected in someways, through HdB as a place of belonging.

## “Yearbook” と「HdB 市民公開講座」を広めたい

笹山 幸子

(編集委員、大阪府立高校 退職校長会 会員)

2022 年から、私は「京都国際学生の家」(HdB) の“Yearbook” の編集に携わっています。大阪大学を卒業後、大阪府立高校の国語科教員として 25 年間勤務し、その後、大阪府教育委員会(主任社会教育主事、首席指導主事)、教頭を経て、3 つの高校で校長を務めました。定年退職後、京都大学大学院で教育行政学の修士号を得ました。

その後、私立大学の教職課程の講師を引き受けました。私の教員としての教育指導経験と校長としての学校経営経験、及び大学院での研究を役立てて、次世代の教職者の育成に尽力しています。生徒を教え育てるという教職の使命・責任・厳しさとともに、生徒の成長に関われる喜び・やりがいを学生達に伝えています。

私の教えている学生達に、“Yearbook” を是非、紹介したいと思っています。今年度、学生達が送ってくれたメッセージの一部です。「私は笹山先生の『教職論』の授業を通して、自分たちが将来目指しているものが、子供達にどれほど大きな影響を与えるかが分かりました。今までは、ただ先生になりたいという簡単な気持ちだけでこの授業を取りました。ですが、だんだん学んでいくにつれて、自分になろうとしているものがどれほど重要な立場の人であり、簡単なものではないのかが分かりました。自分が何となく考えていただけでよくないと気づき、しっかりと責任を持って考えて、言動を起こしたい、起こしていかないといけないなど実感しました」；「一番印象に残っているのは、小中高の時の先生のことについて考えることができた点です。人間としても、学力の面でも成長できたのは、学校では、担任の先生のおかげだと思うし、笹山先生のこの授業がないと考えることがなかったと思うから、本当に良かった。先生方が私達の知らない所で、どれだけ頑張っているのかとか、悩んで悩んで生徒のことを第一に考えてくれているのかを知ることができてよかった。もし、自分が養護教諭になって、生徒と関わることがあれば、これまでの先生のように、『あの先生でよかった、いてくれてよかった』って思ってもらえるような教諭になりたいと思いました」；「笹山先生の授業は、知識だけを教えてくださっているのではなく、授業の方法や形態など、授業そのものが学びであると感じられました。小中高の学校のような授業をしてくださることにより、このように授業を進めていくのだという手順の手本を見せてくださっていたように感じました。また、本当の現場で働いており、校長までされている方から学ぶことができたことはとても大切な体験となったと感じ、とても感謝

しています」等等。このような素直で前向きな思いを綴る学生達に、私も感謝し、次年度へのやる気を出すと共に、“Yearbook”を紹介したいと思っています。

理由は2つあります。1つめは、中久木卓也ハウスファザーのメッセージです。「担任の先生が、クラスの前で、『彼は、私が見ていないところでもちゃんとやっている。』と話してくれ」たことで自信が生まれ、級友達の見る目も変わったという経験を書いておられます。私は授業で、「先生の一言は生徒の人生を左右する」と伝え、生徒指導について教える時、「褒めるときはみんなの前で。叱るときはこっそりと」と伝えているので、“我が意を得たり！”の思いです。また、今年度の授業の中で、アカデミー賞ノミネート作品、山崎エマ監督のドキュメンタリー映画『小学校～それは小さな社会～』も紹介しました。映画の中の児童達は、私達夫婦が、毎朝、玄関前でハイタッチして、挨拶を交わして見送る集団登校の子ども達の姿と重なりました。また、教職者として、先生方の行動に込められた思いに共感して、涙が出ました。この映画をHdBのレジデント達も見たら、日本と世界の学校教育の特質について様々な意見が出て、楽しく有意義だろうなと思います。2つめは、世界や日本で活躍されている卒業生(OM)の方々の寄稿文です。若者への熱いメッセージに溢れています。一部を紹介すると、大菅克知様は、HdBで「多様性を尊重し楽しむ態度」を学ばれ、「相手に礼をもって接する事の大切さ」を医療の現場の体験を通して伝えておられます。川野家稔様は、HdBで「自己主張をすることの大切さ」を学ばれ、HdBを「異文化への対峙を経験する道場」と評されます。辻本圭介様は、HdBでの生活を「多様性に満ちあふれた出会いの場、桃源郷」と振り返り、レジデントに「今自分がある種の桃源郷に居ることを存分に楽しみその体験を糧に新しい扉を開けていく」ようエールを送っておられます。これらは、巻頭言で村田翼夫編集長が言及されている『新ユネスコ教育勧告』の「グローバル・シチズンシップ、持続可能な開発のための教育」の具現化そのものです。編集時に読んで、私もワクワクしました。先輩方のご活躍を知れば、レジデント達は大いに励まされることと思います。私の教える学生達も、HdBの存在を知ると共に、刺激を受けるはずです。

また、これらのOMの方々が講演して下さる「HdB市民公開講座」ももっと多くの方々に知っていただきたい、お知らせしたいと強く思います。学生達は勿論、元・現校長仲間や私が現在、学校運営協議会の座長として関わっている大阪府立高校や大阪府教育委員会・京都市教育委員会の知人にも伝えたいと思っています。

最後に平野克己様との思い出です。私は、3年前の編集委員会からご一緒に活動してきました。集まってくる原稿の推敲や体裁を整える作業を「私がしますから、任せてください。」と引き受けてくださっていました。昨年度は、病床から「作業は手伝えないが、原稿は送ってほしい」と言われていたそうです。今回、内海博司理事長による追悼文を読ませていただき、編集だけでなく、HdBの「本館耐震・リフォームと西館建て替え」の募金活動や「OM会の結成」「HdB市民公開講座」の運営も率先されて取り組まれていたことを知りました。HdBの今後を見守っておられると共に、今年度の“Yearbook”を楽しみされていることと思います。ご冥福をお祈りいたします。

## 年刊誌「YEAR BOOK」への賛助広告について

(公財) 京都国際学生の家 (Kyoto International Student House : 別称 HdB、Haus der Begegnung: 出会いの家) の年刊誌「YEAR BOOK」は、各国大使館・領事館は勿論のこと、関係省庁にも配布し、世界の各地で活躍する卒業生にも送付しています。発行部数は 800 部です。

しかし、コロナ禍の影響で、留学生や外国人研究者などが入国できず、本当に苦しい経営 (学生は 20 人前後、研究者は数人だけ) が続いていました。更に、この物価高で印刷費や送料も高騰しています。しかし法人の年刊誌「YEAR BOOK」は絶やすことは出来ず、HdB の卒業生で自営業 (会社、医院など) の方々や、京都の会社等に、協賛広告の掲載していただくという形でのご支援をお願いしました。

また、このイヤーブックは、pdf として HdB のホームページで公開しています。ホームページ (<http://hdbkyoto.jp/>) の「当財団について」を開き、「イヤーブック」を開いて下さい。過去のイヤーブックも含めて、ダウンロードが出来ます。本学寮の目的や、活動等を知ることが出来ると思います。

### 賛助広告の

ご支援・ご協力に、感謝致します。



創業元禄三年 くら谷大本山前

**元禄**

豊半帖、襖に障子 1枚からお気軽に申し付けください。

お問合せは  
**075-761-6315**



創業元禄二年

聖護院  
八ッ橋

聖護院八ッ橋総本店

京都府左京区聖護院山王町六 電話 075(761)5151



## 公益財団法人 海の星学寮

- 1950年濱中亦七により創立
- 男子大学・大学院生
- 濱中育成基金による生活支援（食事付き、低寮費）
- 多彩な人材による育成支援
- 長期寮生活が可能

寮生募集 若干名の留学生も歓迎します。

詳細は下記のQRコードから



寮生活



入寮案内



アクセス

HP: <https://www.uminohoshi-gakuryo.com/> X: <https://x.com/uminohoshigk>  
〒606-8412 京都市左京区浄土寺馬場町 34

不動産売買・管理

お客様のご期待にそえるよう全力で応援致します。



(社)京都市宅地建物取引業協会会員  
京都府知事(7)第10024号

本 社

〒601-8453  
京都市南区唐橋羅城門前6

中京事務所

〒604-8172 京都市中京区烏丸三条上ル  
場之町592番地 メディナ烏丸御池4階

お問合せは

(075) 950-7080

おかげさまで創業108年 名古屋の老舗特殊鋼商社です

特殊鋼から非鉄金属までトータルで提供



# 株式会社 三悦

本社 〒455-0831 愛知県名古屋市港区十一番一丁目12-3  
TEL 052-381-6311(代) FAX 052-381-1372



## HdB を世界融和のモデルハウスに！



2024年7月コモンミールに Texas 大学の学生を含め当社から 10 名参加。

中久木HMに浴衣の着付けをして戴き大感激、京都の良き思い出となりました。

## テキサス大学から 8 名、2 ヶ月研修



京大桂研究所（蓄電装置の開発）



電動三輪車をソーラーカーに改造



防災産業展に出展・東京ビッグサイト



当社で活躍中の外国籍社員たち

**WAKO** 和晃技研株式会社

【本社】〒601-8448 京都府京都市南区西九条豊田町26  
TEL:075-681-6291 FAX:075-681-6297

代表取締役社長 **岩崎 隆二**（京大機械工学科卒） 専務取締役 **岩崎 マリ**（同志社大心理学科卒）

**Year Book, Vol.49. 2024**

イヤーブック 第 49 号

編集者 内海博司 村田翼夫 中久木裕子 笹山幸子  
山本慶一 吉村一良 木葉丈司  
Adhistry Larasati

発行日 2025 年 3 月 31 日

発行者 公益財団法人京都国際学生の家  
Kyoto International Student House  
(Haus der Begegnung, Kyoto)

〒606-8325 京都市左京区聖護院東町 10  
10, Shogoin-higashimachi, Sakyo-ku, Kyoto-Shi,  
Kyoto 606-8325, JAPAN Tel : 075-771-3648  
e-mail: office@hdbkyoto.jp  
home page: http:hdbkyoto.jp

印刷所 (株) 北斗プリント社 (075-791-6125)

本イヤーブックの印刷・製本の一部は、賛助広告掲載料でまかなった。



<http://hdbkyoto.jp/>

